

登別市  
川上B遺跡

— 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書 —

昭和58・59年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

登別市  
川上B遺跡

— 北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書 —

昭和58・59年度

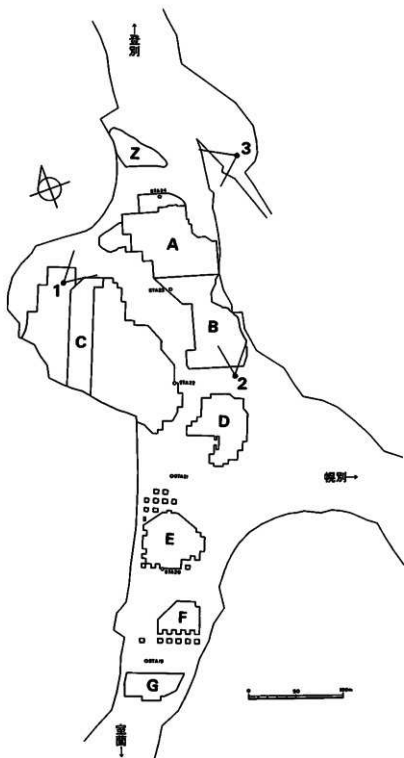
財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1. 西側からみた A 地区と Z 地区(1980年夏)



2. 南側からみた B 地区の調査状況(1983年夏)



道路予定地・道跡の調査部分・写真の撮影位置



3. 東側からみた A 地区, C 地区, Z 地区(1984年, 春)

## 例 言

1. この報告書は、北海道縦貫自動車道(仮称)室蘭東インターチェンジ建設予定地の昭和58、59年度の発掘調査に関するものである。
2. 本書の作成は、調査員全員の討議のもとに次のように分担執筆した。I-1～3 鬼柳彰、I-4、II-1、III、IV-1、2、4、5、IV、西田 茂、II-2 花岡正光、IV-3 森秀之、V、立川トマス。編集は西田茂が担当した。
3. 遺構・遺物の写真は、立川トマス・中村千春・測量は和泉田毅が担当した。
4. 本文・図表中では以下の略号を使用した。  
H：住居跡、P：ピット
5. アルファベットと数字の組み合わせで表現した10m四方の発掘区を5m四方に4等分し、それを南西隅から左まわりにa、b、c、dの記号をつけて呼称した(例：S-5-c)。
6. 遺構の規模は、確認面における長径×短径×深さ、単位mで示した。

# 目 次

例 言	
I 調査の概要	3
1 調査要項	3
2 調査体制	3
3 調査の経緯	4
4 調査の概要	4
II 遺跡の環境と堆積物	10
1 位置と環境	10
2 堆積物について	12
III 遺物の分類	27
1 土器	27
2 石器等	29
IV A地区の調査	33
1 概要	33
2 55年度調査の補遺	34
3 58年度の調査	34
4 59年度の調査	47
5 小括	64
V B地区の調査	65
1 概要	65
2 遺構と遺構出土の遺物	65
3 包含層の遺物	75
4 小括	84
VI Z地区の調査	94
1 概要	94
2 包含層の遺物	94
3 小括	95

# I 調査の概要

## 1 調査要項

事業名 北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査業務  
事業委託者 日本道路公団札幌建設局  
事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
遺跡名 川上B遺跡（北海道教育委員会登録番号：J-03-6）  
地区名・所在地・調査面積及び調査期間

地区名	所在地	面積	調査期間
A地区	登別市青葉町17-5ほか	1,210㎡	昭和58年4月1日～昭和60年3月30日
B地区	登別市青葉町18・19番地	5,100㎡	昭和58年4月1日～昭和59年3月30日
乙地区	登別市青葉町17ほか	1,200㎡	昭和59年4月1日～昭和60年3月30日

## 2 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

理事長	中村 龍一
業務部長	横田 直成
調査部長	竹田 輝雄
調査第四班長	鬼柳 彰（発掘担当者）
文化財保護主事	西田 茂
〃	長沼 孝
〃	立川トマス
〃	田口 尚
嘱託	和泉田 毅
〃	花岡 正光
〃	森 秀之
〃	中村 千春
〃	中田 裕香

調査にあたっては、文化庁、奈良国立文化財研究所および北海道教育委員会の指導をいただいた。また、つぎの機関及び人々の協力を得た。

登別市教育委員会、登別市役所、北海道開拓記念館、北海道立登別南高等学校、登別市立青葉小学校、登別市立図書館、登別市立郷土資料館、室蘭市民俗資料館、虻田町教育委員会。

北海道開拓記念館 野村崇、赤松守雄、北海道立登別南高等学校 街道重昭、室蘭市民俗資料館 久末進一、青森県教育委員会文化課 福田友之、札幌医科大学 大島直行、北海道文化財研究所 松谷純一、川内 基、国立歴史民俗博物館 西本豊弘、八雲町教育委員会 三浦孝一、



森町教育委員会 藤田登・名取さつき、帯広市教育委員会 佐藤訓敏、宮城学院女子大学 工藤雅樹、苫小牧市教育委員会 佐藤一夫、胆振地団研 春日井昭、倉沢保文、佐藤三井共同企業体

### 3 調査の経緯

日本道路公団は現在、北海道縦貫自動車道の建設工事を進めている。北海道教育委員会は昭和51年度に、この計画路線のうち苫小牧・室蘭間の埋蔵文化財包蔵地所在確認調査を実施した。その結果、登別市内においては、本道跡を含めて5ヵ所の遺跡が工事区域にかかることが判明した。

登別市川上B遺跡は、室蘭東インターチェンジ（仮称）工事部分にあたる。範囲確認調査は昭和54年度から3次にわたって行われ、いずれも工事計画の変更が不可能であるところから、記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和55年度から実施されており、今年度までの調査終了地区は下記の表の通りである。このうち昭和57年度までに発掘を完了した地区については、報告書を刊行済みである。

地区	調査対象面積(m <sup>2</sup> )	発掘調査期間	調査実施面積(m <sup>2</sup> )
A	7,210	55.5～10	6,000
		58.7～10	710
		59.8～10	500
B	5,100	58.7～10	5,100
		57.4～10	9,765
C	17,805	58.7～10	2,740
		59.8～10	3,800
		57.4～10	3,110
D	3,110	57.4～10	3,110
E	3,485		3,485
F	1,400		1,400
G	1,535		1,535
Z	1,200		1,200
計	40,845	59.8～10	39,345

※C地区の残り1,500m<sup>2</sup>については、昭和60年度に調査予定である

### 4 調査の概要

#### 発掘区の設定

現地調査の基本図は、HOKKAIDO EXPRESS WAY PLAN (NOBORIBETSU-TOMAKOMAI) 縮尺1:1,000のNo.49-3と4を使用した。

A地区・B地区の発掘区の設定は以下のとおりである。

まず、STA 22(直角平面座標系第Ⅱ系、X=-177440.161, Y=-95967.459)とSTA 24(同、X=-177247.628, Y=-95913.951)を見通し、それをM列とする。STA 22の南端をM-1とし、STA 24からM-21となるように10m単位に区切る。そしてM列に平行する線を10mごとに引き、東へ向かってN, O, P……、西へ向かってL, K, J……の各列を設定する。このようにして区画された10m四方の区域は、それぞれ南西隅の列記号で呼称する。5m四方



- |            |             |            |          |
|------------|-------------|------------|----------|
| 1. 川上B道跡   | 2. 千歳1道跡    | 3. 「千歳2道跡  | 4. 千歳3道跡 |
| 5. 「千歳4道跡  | 6. 千歳5道跡    | 7. 「千歳6道跡  | 8. 千歳7道跡 |
| 9. 山本1道跡   | 10. 山本2道跡   | 11. 米男子道跡  | 12. 片倉道跡 |
| 13. 米島道跡   | 14. 観別道跡    | 15. 川上A道跡  | 16. 富岸道跡 |
| 17. 富岸神社道跡 | 18. 富岸小学校道跡 | 19. 亀田公園道跡 |          |

図1-1 道跡の位置 (この図は同地理院発行の5万分の1地形図「登別温泉」を複製したものである。)

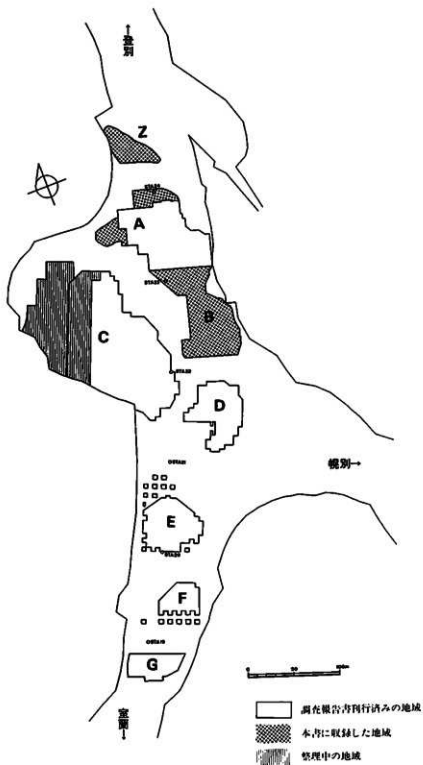


図1-2 道路予定地と遺跡の地区

の小発掘区は、例言に示したとおりである。昭和54年度の事前発掘調査では、10m四方の各区画の中央を2m四方発掘した。しかし、このことが、翌55年度には5m四方の小発掘区を設定する上で障害となったため、全体の区画を、北と東へそれぞれ2m移動させて発掘した。発掘区北軸は、座標系に対して15°31'53"である。Z地区では、59年度の事前発掘調査の段階からA地区の発掘区を延長して使っている。

#### 土層の区分

土層の区分は、昭和55年度、57年度と同じように、次のようにおこなった。

- I層 表土層。黒色腐植土。灰白色や灰褐色の火山灰の薄層が2～4層挟んでいる。最下層の火山灰層までをI層とした。
- II層 火山灰層下の黒色土層。I層より粒径が小さく、乾燥するとクラックができる。縄文時代中～後期の遺物包含層。
- III層 シルト質降下軽石層及び腐植がかったシルト層。降下軽石層は、沢や竪穴住居跡などの凹地に堆積している。縄文時代早～前期の遺物包含層。
- IV層 角礫及び黄褐色シルト層。本層の中に、N、Us-c火山灰の二次堆積物が挟んでいる。遺物は出土していない。Z地区は河床礫のところがある。

A地区 昭和55年度調査区域の西側(58年度)と北側(59年度)の2カ所を調査した。58年度の調査区域は標高20～25mのところである。縄文時代中期の住居跡1、土壇3を検出した。遺物は、縄文時代早期と中期の土器、石器などが400点ほど出土した。

59年度の調査区域は標高14～19mのところである。遺構は確認されていない。遺物は、縄文時代早期と中期の土器、石器などが1,800点ほど出土した。縄文時代早期の土器は、口縁部に円孔をもつ特色のある土器のほかに、東銅路Ⅲ式、コックロ式、東銅路Ⅳ式などがある。

B地区 昭和55年度に調査したA地区の南側、標高15～25mのところである。土壇13、小土壇5、焼土1を検出した。土壇には、縄文時代中期と考えられるものがある。遺物は、縄文時代早期と中期の土器、石器などが5,800点ほど出土した。縄文時代早期の土器には、住吉町式、東銅路Ⅲ式、コックロ式、東銅路Ⅳ式などがある。

Z地区 ヤンケシ川の河川敷に接する標高15～20mのところである。遺構は確認されていない。遺物は、縄文時代早期と中期の土器、石器などが900点ほど出土した。縄文時代早期の土器は、結条体圧痕文の土器である。

(付) 昭和55年度から昭和59年度までに調査をおこなったのは、図1-2に示したA～GとZ地区の8地区。調査面積39,345㎡である。出土した土器は、すべて縄文時代のものであり、早期、前期、中期、後期のものがある。この土器の地区別、分類別の出土状態は表1-1のとおりである。この表は、住居跡などの遺構を検出できて主体的な遺跡をなしているものとみなされる土器と、ごく少量(個体にして10個以下)しか出土していない土器、およびそれら二者の中間的数値の土器という、三つの区分で示している。

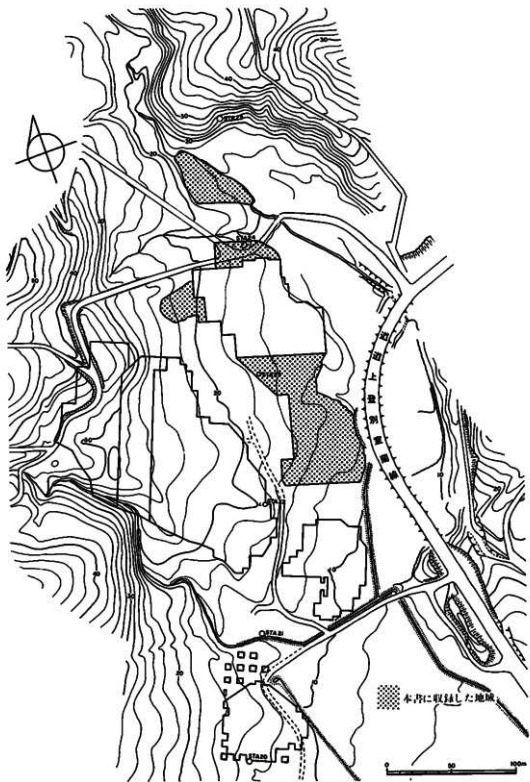


図1-3 遺跡周辺の地形

表I-1 川上ら遺跡の地区別の土器出土表  
 1 ● ごく少量  
 2 ●● 1〜3の中間  
 3 ●●● 多量(主体的な選別をなしている)

時期区分	地区	G	F	E	D	C	B	A	Z	土器の分類記号	相対する土器型式名など
縄文時代晩期										Vc Vb Va	
	後期					●				Wc Wc Wb Wb Wa Wa	堂林式 手稲式 船泊上層式・ウサクマイC式 入江式 余山式・手稲砂山式
		中期	●	●		●●●	●	●	●	●	IIIb-3 IIIb-2 IIIb-1 IIIa
前期										IIb IIa-2 IIa-1	円筒下層式 春日町式・中野式 網文土器
	早期	●	●●	●	●●●	●	●	●●	●	Ib-4 Ib-3 Ib-2 Ib-1 Ia Ia	東御路IV式 中茶路式 コックロ式 東御路III式 格条神山新文のある土器 貝器文・桑江文のある土器

## II 遺跡の環境と堆積物

### 1 位置と環境

川上B遺跡は、登別市幌別市街の南西約2.5 kmに位置する(図I-1)。カムイヌプリ(標高750 m)の南東山麓にあたり、ヤンケシ川とその支流に面した緩斜面(標高10~35 m)上にあたる。遺跡の前面には、縄文海進の痕跡とみられる低湿地が広がり、ここから東南方向約1 kmで海岸線に到達する。

昭和54年秋の事前発掘調査時の景観と土地利用状況は、次のとおりである(図I-2・3)。

A・B地区は、乳牛用の飼料畑、C地区は放牧地・採草地・笹やぶ・河川敷、D地区は民家・菜園・庭木園、E・F・G地区は放牧地・採草地であり、D・E・F地区の前面には泥炭地を改良した採草地が広がっている。A地区の東側の河川敷には自然木と考えられるホウノキ・トチノキ・オニグルミなどの落葉広葉樹林があり、遺跡周辺の藪にはクリ・サンショウ・ヤマザクラ・ハギ・コクワ・マタタビなどがみられる。

植栽樹と考えられるものは、C地区の西側にある屋敷林のトドマツとB地区の東側にあるウメノキである。G地区の西約50 mの斜面には、J.パチュラーの屋敷跡という平坦面があり、この平坦地の南側の林地には胸高径40 cmほどのイチイが1本ある。この屋敷から幌別の市街へ通じる旧道の痕跡と思われる松並木がE地区の西側に数本残っている。

C・E・F・G地区の西側は傾斜が急になり、放牧地・山林になっている。A地区の北側は、民家・菜園・放牧地である。この民家の東北方向の一段と低くなった河川敷の部分が、59年度に発掘をおこなったZ地区である。

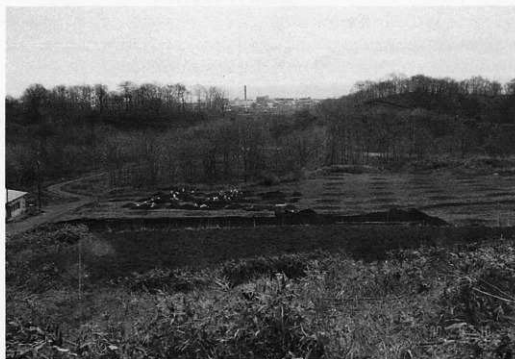
1967年刊行の『登別町史』によれば、登別市は道内では有数の多降水地域で、雨量は2,000 mmをこえる。雨は夏に多く、冬は少ないが、8~9月にたびたび集中豪雨がおこる。発掘調査期間の昭和55年8月末の豪雨、昭和58年9月25日の集中豪雨などは市民生活に多大の被害をもたらし、発掘調査にも直接、間接の影響を与えた。昭和57年度に調査したF地区でみられた土砂の堆積は、このような豪雨が縄文時代中期後葉におこったことを推定させる。また昭和59年度のC地区の調査でも、土砂崩れが縄文時代に少なくとも2回はおこったであろうことが推定される。

遺跡の立地する緩斜面に、寒冷環境下におけるソリフラクションが推定されたのは、昭和57年度の調査時である<sup>1)</sup>。遺跡の形成後においても礫の一部は動いている可能性は、昭和55年度の調査中にも観察されていたが、昭和58年度のC地区の調査では、このことを一層明瞭に観察することができた。昭和58年度のB地区の調査では、巨礫の詳細な観察をおこなった。この成果は次の「2 堆積物について」で述べる。

注) 花岡正光・堀田正巳(1983): 川上B遺跡周辺の地形・堆積物と斜面の地史, 川上B遺跡—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書一, pp. 13-22.



B地区からA地区をみる(1980年秋)



C地区・F-102区からA地区をみる(1980年春)



## 2 堆積物について

### I はじめに

本遺跡の堆積物については、昭和55・57年度報告書において主として定性的な記載をした(花岡・福田, 1983)。堆積物の中で注目されたのは、火山灰起源の粘土質シルト(いわゆる「ローム」)をマトリックス<sup>1)</sup>とする巨角礫層と火山砕屑物である。前者は過去の周米河<sup>2)</sup>環境下で生じたソリフラクション<sup>3)</sup>堆積物であり、後者は数枚の完新世の降下火山灰層と更新世の降下軽石層である。

昭和58年度の発掘調査においては、これらの堆積物の特徴をなるべく定量的に取扱い、記載をすることにした。巨角礫層については、ソリフラクション礫の特徴を明らかにするために、礫の分布図を作成し、ファブリック<sup>4)</sup>・粒度・球形度・円磨度を測定した。火山砕屑物については、同定の基礎資料とするために鉱物組成・火山ガラスの形態・粒度を記載した。なお、更新世の軽石層については別の機会に報告する。

### II 巨角礫の堆積学的特徴

#### 1 礫の分布

図II-1に、礫層堆積面上の巨礫(径256mm<)の平面的分布を示す。谷部に比較的密集するようにみえるが、これは礫層堆積後の侵蝕によるものと考えられる。巨礫未満の粒径のものがこれらの間に一面に散在している。グリッド0-4を中心とする舌状地形の部分では、表面は礫が少ないが、旧石器確認トレンチの断面では巨礫が認められた。

#### 2 ファブリック

グリッドQ-6-d・Q-7-a及びS-4-a・b・dにおいて、礫の長軸のオリエンテーション<sup>5)</sup>を測定した。結果を図II-2に示す。Q-6-d・Q-7-aでは、複モードから成る方向性が認められる。これらは概ね直交している。主モードの方向と斜面の最大傾斜方向とはずれがある。斜面の傾斜と長軸の傾斜との関係では、後者が斜面の傾斜方向とは逆の向きに傾いている。現地での観察では発達程度の弱いインプリケーション<sup>6)</sup>を示していた。S-4-a・b・dでは、同じく複モードから成る方向性が認められ、これらは直交している。主モードの方向と斜面の最大傾斜方向とはほぼ一致している。斜面の傾斜と長軸の傾斜との関係では、主モードが斜面の傾斜とは逆の向きではあるが、全体としてはほぼ斜面と平行とみなすことができる。

#### 3 粒度

グリッドR-3を中心は大礫以上について任意に200個、長径・中径・短径を測定した。長径による粒度組成を図II-3に示す。モードは128~256mmで47%を占める。最大礫径は

1770 mm であった。

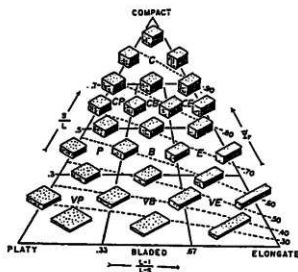
#### 4 球形度

粒度測定を行った礫の中から 183 個について、Sneed & Folk (1958) の式<sup>7)</sup>によって球形度を求めた。結果を図 II-4 に示す。0.4~0.6 で 63.5% を占める。形状は VE・B・VB・P・VP が多い。

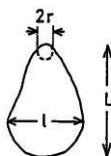
#### 5. 円磨度

粒度測定を行った礫の中から任意の 108 個について、Kuenen (1956) の式<sup>8)</sup>によって円磨度を求めた。結果を図 II-5 に示す。10~60 の各階級が 9.3~21.3% で比較的頻度が大きい。50 ずつの階級区分では全体の 62% が 0~50 に入る。円磨度は 150 以下に収まる。

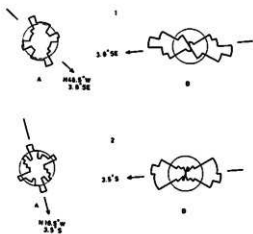
- 1) matrix, 基質。礫の間を充填している細粒物質。
- 2) 水河周辺の意。土壌・岩石・水の凍結・融解作用が卓越し、岩層の生産・移動により構造土や岩海が形成される。最終氷期の北海道の大部分が周水河環境下にあったと考えられている。現在の日本では高山地域に周水河地域が分布する。
- 3) solifluction, 本米。斜面表層部での水で飽和された土壌物質のゆっくりした流動。周水河環境下で起こる全ての緩慢な移動に対して用いることも多い。ここでは後者の意で用いている。
- 4) fabric, 鉱物粒・礫等の空間的な配置。
- 5) orientation, 鉱物・礫等の配置方向。ここでは礫の長軸の方向性。
- 6) imbrication, imbricate structure, 水流の作用により、板状の礫が水底面(堆積面)に対し斜めに傾き、扇根に瓦を葺くときのように多数が重なりあった構造。
- 7) 球形度  $\psi = \sqrt{S^3/L^3}$  ( $L$ : 長径,  $I$ : 中径,  $S$ : 短径) で表わされる。それぞれの球形度に対する形状は下図の通りである。
- 8) 円磨度は  $\frac{2r}{l} \times 1000$  ( $r$ : 最小角径の内接円の半径,  $l$ : 長軸と直角方向の最大径(中径))。



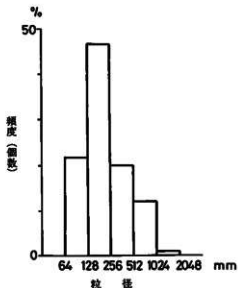
形状図(Sneed & Folk, 1958)



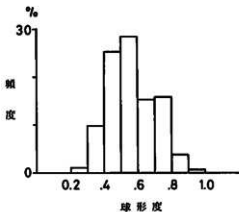
円磨度測定法  
(Kuenen, 1956)



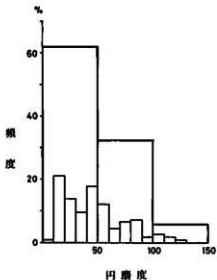
図II-2 礫の長軸のオリエンテーションを示すローズダイアグラム(測定数1;39,2;50)  
 1: グリッドQ-6-dとQ-7-a 2: グリッドS-4-a, S-4-b及びS-4-d A: 斜面の方向と礫の長軸方向との関係。矢印は斜面の最大傾斜方向。B: 斜面の傾斜と礫の長軸の傾斜との関係。矢印は斜面の平均傾斜。円は10%を示す。



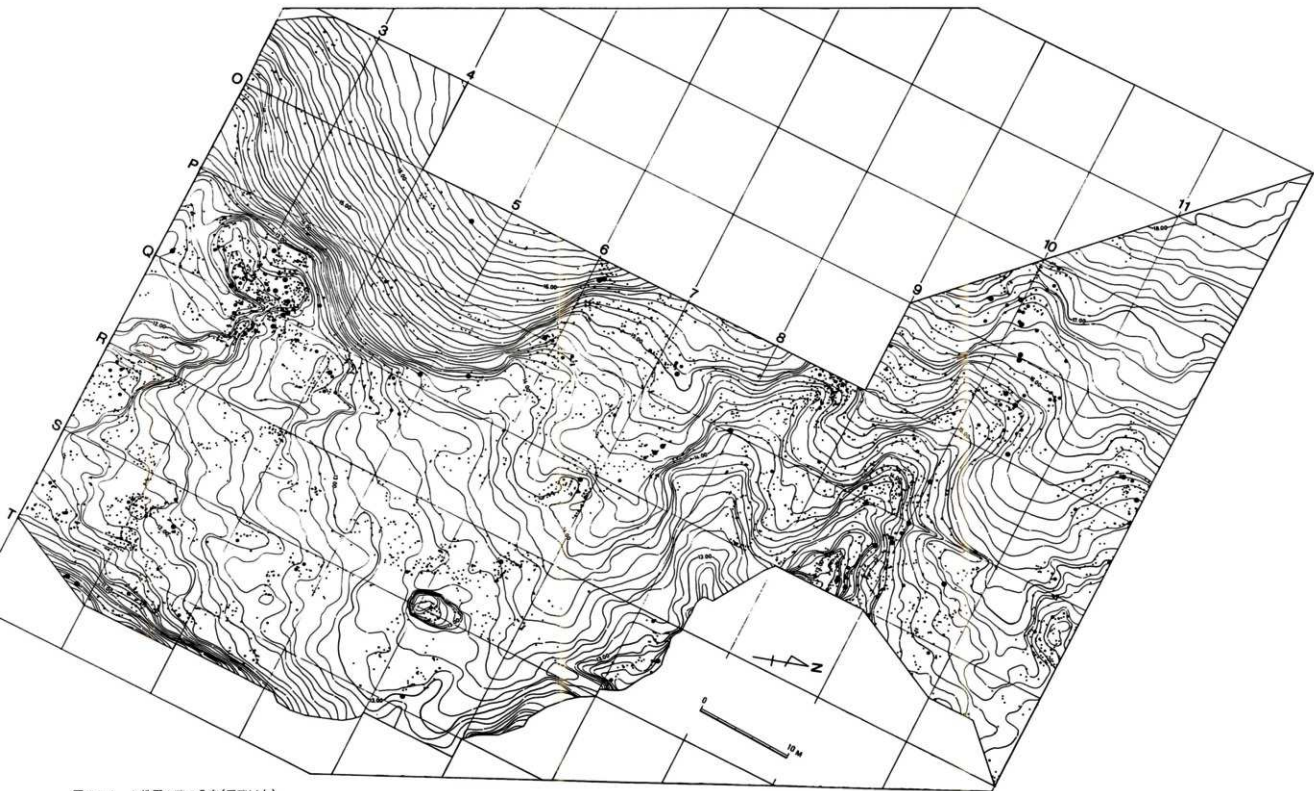
図II-3 礫の粒径分布  
 (中礫以上, 測定数200)



図II-4 礫の球形度分布  
 (中礫以上, 測定数183)



図II-5 礫の円磨度分布  
 (中礫以上, 測定数108)



図II-1 B地区の礫の分布(巨礫以上)

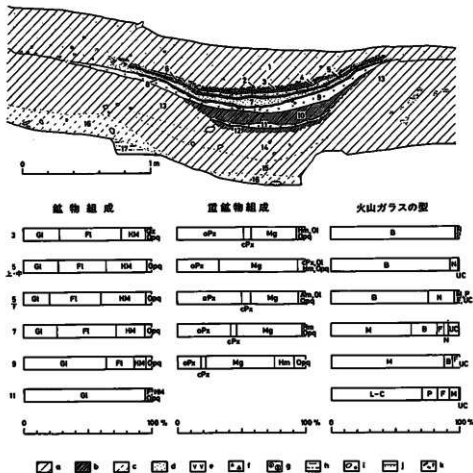
## III 火山砕屑物

## 1. 層序

多くの火山砕屑物が認められる地質断面の例として、グリッドH-100-CとP-2-dの断面を示す(図II-6・7, 図版IIの4)。これらのグリッドでは浅い凹地に数枚の火山灰層が堆積しており、保存状態も良い。各断面の層序は上位から下位へ次の通りである。

## H-100-C

1. 黒色(5 YR 1.7/1)シルト～粘土質腐植土, 10～30 cm, 灰色の粗粒砂大の岩片を頗る多く含む。白色の軽石礫, 長さ1 cm>の炭化木片を含む。



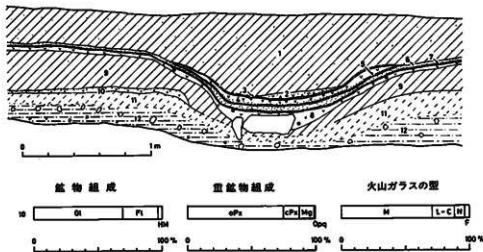
凡例

地質断面

a: 黒色腐植土 b: 黒色炭灰質腐植土 c: 黒～黒褐色腐植土 d: 砂質降下火山灰 e: シルト質降下火山灰 f: 岩片・スコリア礫 g: 軽石礫 h: 褐色粘土質シルト i: 珪角礫 j: 鉄礫層 k: 炭化物片  
 鉱物・重鉱物組成・火山ガラスの型(3・5・7・9・11は地質断面の第3・5・7・9・11層に対応)  
 Gl: 火山ガラス Fl: 長石 Qz: 石英 Hm: 重鉱物 oPx: 斜方輝石 cPx: 單斜輝石 Am: 角閃石 Ol: 橄欖石 Mg: 磁鉄鉱 Hm: 赤鉄鉱 Opq: 不明 B: 漿果状 F: 纖維状 L-C: 直線～曲線状リズ M: 網目状 N: 針状 P: 平板状

図II-6 H-100-Cにおける地質断面と火山灰の鉱物組成

2. 黒色 (10 YR 1.7/1) 泥炭質粘土質腐植土, 1 cm。
3. 灰黄褐色 (10 YR 4/2.5) 細粒砂～シルト質降下火山灰, 1.5～2 cm。下半部に灰色の粗粒砂質岩片・スコリア, 白色の砂質軽石の薄層があり, 二つのフォールユニット<sup>®</sup>から成る。
4. 黒色 (5 YR 1.7/1) 泥炭質粘土質腐植土, 1.5～2.5 cm。中礫質の岩片・スコリア・軽石を含む。
5. 暗灰黄色 (2.5 Y 3.5/2) 細粒～粗粒砂質降下火山灰, 1.5～4 cm。基底部では厚さ 0.5 cm の粗粒砂質軽石層となる。本層中には部分的に粗粒砂～細礫質のスコリア・軽石の集積部がある。少なくとも二つのフォールユニットから成る。
6. 黒色 (10 YR 1.7/1) 泥炭質粘土質腐植土, 1.5～2 cm。基底に局所的に細礫質の軽石を含む。
7. 浅黄褐色 (10 YR 8/3) 粗粒砂質降下軽石, 2～4.5 cm。本層は第9層とともに, 遺跡全域に亘って連続性が良い。
8. 黒色 (7.5 YR 2/1) 粘土質腐植土, 1 cm。炭化植物片を含む。
9. ぶい黄褐色 (10 YR 4/3) シルト質降下火山灰, 3～9 cm。中礫質の軽石・スコリア・岩片を含む。
10. 黒色 (N 1.5/0) 粘土質腐植土, 8 cm。
11. オリーブ褐色 (2.5 Y 4/3) シルト質降下火山灰, 3 cm。
12. 黒色 (N 1.5/0) 粘土質腐植土, 4.5 cm。
13. 黒色 (10 YR 1.7/1) 粘土質腐植土, 42 cm。
14. 赤黒色 (7.5 R 1.7/1) 粘土質腐植土, 11 cm。輝石安山岩の角～亜角礫を含む。
15. 黒色 (N 1.5/0) 粘土質腐植土, 8 cm。輝石安山岩の角～亜角礫を含む。

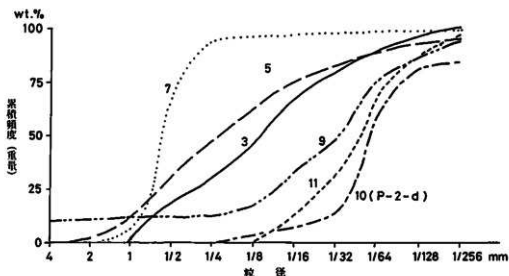


図II-7 P-2-dにおける地質断面と火山灰の植物組成  
(凡例は図II-6を参照)

16. 黒褐色 (5 YR 2/1) ~ 黒色 (5 YR 1.7/1) 粘土質腐植土, 5~18 cm, 砂を含む。  
 17. 褐色 (7.5~10 YR 4/4) 粘土質シルト, 10 cm+, 砂を含む。

P-2-d ([ ] 内はH-100-Cで対比される層準を示す。)

1. 黒色砂~シルト質腐植土, 30~60 cm, 砂質の軽石を含む。炭化植物片を含む。[第1層]
2. 暗灰色中粒砂~シルト質降下火山灰, 最大厚4 cm, 下部に最大径1 cmの岩片・スコリアが点在する。[第3層]
3. 黒色泥炭質腐植土, 1 cm±。[第4層]
4. 暗灰色粗粒砂~シルト質降下火山灰, 4 cm, 上部は細粒, 下部は粗粒砂質の軽石層。最上部には径0.5 cm>の軽石・岩片・スコリアを含む。少くとも二つのフォールユニットから成る。[第5層]
5. 黒色泥炭質腐植土, 1 cm±。[第6層]
6. 砂質降下軽石, 4 cm [第7層]
7. 黒色粘土質腐植土, 1 cm, 炭化植物片を含む。[第8層]
8. 淡灰褐色シルト質降下火山灰, 2~11 cm, 白色の軽石礫を含む。[第9層]
9. 黒色粘土質腐植土, 6~30 cm。[第13層]
10. 明黄 (~赤褐) 色シルト質降下火山灰, 5 cm, 上部は鉄質の硬盤層となっている。この火山灰は遺跡内の浅い凹地に断片的に分布している。
11. 暗褐色粘土質腐植土, 5~20 cm, 輝石安山岩の角礫を含む。[第16層]
12. 黄色粘土質シルトをマトリックスとする輝石安山岩の巨角礫層, 25 cm+。[第17層]



図II-8 累積頻度曲線で表わした火山灰の粒度組成

## 2. 火山灰の分析

これらの断面に認められる堆積物のうち、H-100-Cの第3・5・7・9・11層とP-2-dの第10層の降下火山灰について、粒度分析を行い、鉱物組成・火山ガラスの形態を調べた。火山灰は以下の手順で処理した。

まず、風乾試料20～80gを、径1/16mm<は篩で、1/16mm>はピベット法で分けず。各粒度階級の重量値を累積頻度曲線として表わし(図II-8)、図から中央粒径(Md, mm)<sup>10)</sup>・分級度(So)<sup>11)</sup>を求めた。

次に、1/4～1/8mmの粒度階級のものについて、6% $H_2O_2$ ・10%HCl処理をし、カナダバルサムを封入剤として全鉱物と重鉱物(比重2.85のトゥーレ液で分離)の各プレパラートを作成する。これらを偏光顕微鏡下で200～300個検鏡し、鉱物組成を個数比で表わした(図II-6・7)。

火山ガラスは火山灰層の特徴を知るために重要である(Yokoyama, 1969, 吉川, 1976等)。ここでは「全鉱物」プレパラート中からそれぞれ200個以上検鏡し、形態を分類して個数比を求めた(図II-6・7)。形態は、主に気泡の形状とガラス粒子全体の形状によって以下のように分類した(図版IIの2)。

**B型(漿果状, berry-shaped)**: 気泡が微細で見かけ上発泡度が悪く、全体の形状が漿果状。

例外なく微細な不透明粒子が附着する(写真1)。

**F型(繊維状, fibrous)**: 偏平で気泡が細長く平行に伸びているもの(写真2)。

**L-C型(直線～曲線状リッジ, linear and/or curved ridge)**: 比較的大きな気泡が破砕して気泡間の泡壁がリッジをなして直線～曲線状に数本走るもの(写真3)。

**M型(網目状, meshy)**: 気泡と泡壁のつくる模様か網目状に見えるもの。気泡の形は不規則でL-C型よりもはるかに小さい。気泡がやや引き伸ばされたものもあるが、この型に含めた(写真4)。

**N型(針状, needle-shaped)**: 全体の形状は、周縁部で薄く中央部で厚く盛り上がっている。周縁部で針状の気泡・条線が認められる。中央部は微細な不透明粒子が附着し、B型の表面外観に似る。周縁部の針状気泡・条線は平行的に配列するものと、方向性のないものとの二種があるが、一括して表示した(写真5)。

**P型(平板状, platy)**: 薄い板状。リッジが1～2本走る場合がある(写真6)。

**UC(未分類, unclassified)**: 上記のいずれにも属さない型で、出現率もごく小さい。

B・N型を除いては透明で、透過照明で光をよく通す。

各火山灰の特徴は以下の通りである(図II-6・7・8)。

### H-100-C

第3層: 斜長石に富む火山灰で、アルカリ長石と石英を僅かに含む。重鉱物量は、斜方輝石>磁鉄鉱>単斜輝石で橄欖石・赤鉄鉱を僅かに含む。火山ガラスはほとんど全てB型でN・P型を僅かに含む。粒度は砂分に富み70%弱を占める。Md=0.11, So=2.82。



第5層上・中部：斜長石が比較的多いが重鉱物量も多い。アルカリ長石が僅かに認められる。重鉱物量は、磁鉄鉱>斜方輝石>単斜輝石で、橄欖石・赤鉄鉱を僅かに含む。火山ガラスはほとんどB型で、N型も含まれる。粒度は砂分に富み70%を占める。Md=0.23, So=3.00。

第5層下部：斜長石が比較的多いが、重鉱物量も多い。アルカリ長石が僅かに認められる。重鉱物量は、斜方輝石>磁鉄鉱>単斜輝石で、角閃石・橄欖石が僅かに含まれる。火山ガラスはB型が多く、N型も含まれる。試料採取量が少ないので粒度分析は行っていない。

第7層：斜長石が比較的多い。重鉱物量は、磁鉄鉱>斜方輝石>単斜輝石で、赤鉄鉱を僅かに含む。火山ガラスはM型が比較的多く、B・F型も認められる。粒度は、粗粒～中粒砂分で約90%を占める。極めて分級の良い火山灰で、Md=0.6, So=1.23である。

第9層：火山ガラスが比較的多く、重鉱物量が少ない。重鉱物量は、磁鉄鉱>斜方輝石>赤鉄鉱>単斜輝石で、赤鉄鉱の量が目立つ。火山ガラスはM型がほとんどで、僅かにB・M型を含む。粒度は、シルト分で60%を越すが、中～細礫分も約11%含まれる。Md=0.029, So=2.30。

第11層：ほとんど全て火山ガラスから成り、僅かの斜長石と重鉱物を含む。重鉱物量は概く僅かであるので、重鉱物分離を行っても個数比を求めるに十分な数は得られなかった。火山ガラスは大部分L-C型で、P・F・M型を含む。粒度はシルト分で80%を越える。極めて分級の良い火山灰で、Md=0.021, So=1.61である。

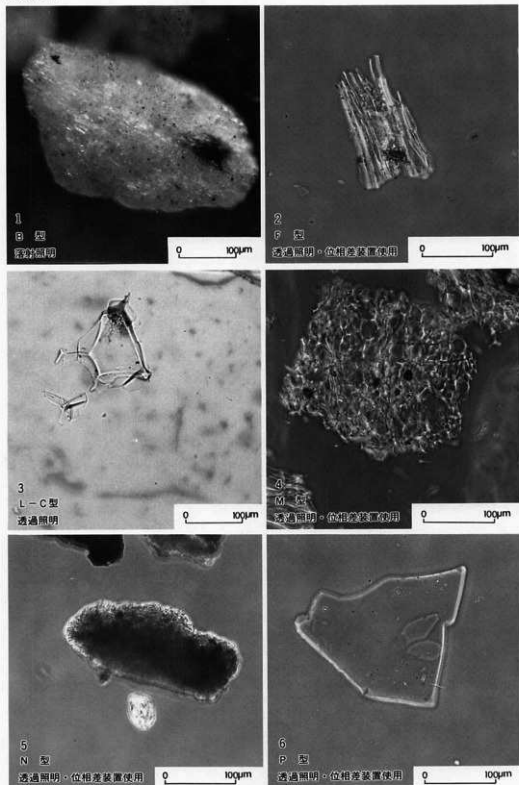
#### P-2-d

第10層：本層上部は鉄盤層を成し、また全体に鉄分に汚染されているので、なるべく新鮮な試料を得るために、隣接グリッドP-3-bから得た試料について分析した。本火山灰は火山ガラスに富み、重鉱物は少ない。重鉱物量は、斜方輝石>単斜輝石=磁鉄鉱である。火山ガラスはM型が大部分で、L-C・N型が含まれF型を僅かに含む。粒度はシルト分で約70%を占める。極めて分級の良い火山灰で、Md=0.018, So=1.27である。

#### 注)

- 9) fall unit. 降下火砕堆積物の色調・粒径・岩相・岩質等の特徴によって区分される最小の地質的単位。
  - 10) 対象とする堆積物とその粒径より粗粒なものが50%、細粒なものが50%であるような粒径。粒度分布の累積頻度曲線図において、累積重量百分率が50%のときの粒径値を読み求める。
  - 11)  $So = \sqrt{Q_3/Q_1}$  ( $Q_1$ : 粒度分布の累積頻度曲線図において、累積重量百分率が75%のときの粒径値 (mm),  $Q_3$ : 同じく25%のときの粒径値 (mm))
- (「注」は主として、地学団体研究会編 (1981): 地学事典 (増補改訂版)、町田他編 (1981): 地形学辞典、及び引用・参考文献による。)

図版IIの2



図版IIの2 火山ガラスの形態

## IV 若干の議論とまとめ

## 1. 巨角礫層

本層の堆積物は、径128～256 mmの階級をモードとする礫と、マトリックスが粘土質シルトから成る、分級の極めて悪い層相を示す。これは、火山灰の風化物が礫間を充填しているためである。

礫の円磨度は150未満で、特に0～50の階級に頻度が高い。Kuenen (1956) に示された円磨度測定値では、ソリフラクション堆積物は円磨度300未満、特に0～50のものが60～90%の頻度を示す。本遺跡の礫の円磨度もソリフラクション堆積物の特徴を示しており、マトリックスの粘土質シルトを滑剤として移動してきたものと考えられる。

礫のファブリックは必ずしも明瞭ではない。それはシルト質土の中で凍上による擾乱を受けていると考えられるからである。礫の中には、長軸をほぼ垂直にして立ち上がっているものも多い(図版IIの3)。礫の長軸のオリエンテーションは、斜面の最大傾斜方向と概ね平行的なものが多く、これはソリフラクション堆積物の特徴的なファブリックと考えられている(Harris, C., 1981)。しかし、斜面の最大傾斜方向と直交するオリエンテーションも比較的頻度が大きく、長軸方向と平行的に斜面最大傾斜方向へ礫が滑動するだけでなく、長軸を回転軸として転動する礫も多いことを示している。本巨角礫層の生成時期には海水準は現在よりも低かったと考えられるので、ファブリック測定地点の斜面上の位置は現在とは違っていたであろう。斜面堆積物のファブリックの問題は、岩層がどのような斜面領域で堆積したか(関根, 1981)ということとマトリックスの物質の性状に左右され、単純には解決され得ない面を含んでいると思われる。

ソリフラクション礫の形状は、源岩の節理系や凍結破砕時の割れ方に支配されると思われ、形状と礫の成因・生成環境との関係は未知の部分が多い。

## 2. 降下火山灰

H-100-Cの第3・5層は類似した鉱物組成(但し、重鉱物組成では⑤上・中部で磁鉄鉱量>斜方輝石量)であること、火山ガラスの形態が類似すること、また層相も似ていることから同一火山の噴出物と考えられる。第7・11層及びP-2-dの第10層は、分級度の点から他の火山灰と異なり、比較的遠方の火山に由来するものと考えられる。第11層はほとんど全て火山ガラスから成り、鉱物組成上も特異な火山灰である。P-2-dの第10層は、遺物包含層との関係から縄文時代早～中期の噴出物と考えられ(北海道埋蔵文化財センター, 1983)、考古学編年上の鍵層となり得る。

これらの火山灰の噴出源は目下のところ不明である。横山他(1973)や北海道火山灰命名委員会(1982)の記載・火山灰分布図から判断すると、第3層は有珠山III<sub>a</sub>火山灰(Us-III a<sub>1</sub>)、第5層は有珠山IV a (Us-IV<sub>a</sub>)、第9層は有珠山b<sub>2</sub>火山灰(Us-b<sub>2</sub>)と考えられるが、野外

での十分な追跡調査が行われていないので結論は出せない。P-2-dの第10層は鍵層として重要であるので、今後広域に亘る調査が望まれる。

火山灰試料の分析に当っては、北海道大学環境基礎学研究室の諸氏に便宜を計って頂いた。感謝する次第である。

#### 引用・参考文献

- Fairbridge, R. W. and Bourgeois, J. (eds.) (1978): *The Encyclopedia of Sedimentology*. Dowden, Hutchinson & Ross, Stroudsburg, 901pp.
- 花岡正光・福田正巳 (1983): 川上B遺跡周辺の地形・堆積物と斜面の地史。川上B遺跡—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書一。札幌 pp. 13-22.
- Harris, C. (1981): *Periglacial mass-wasting—A review of research*. BGRG, Res. monograph ser. 4, Geo Books, Norwich, 204pp.
- 北海道火山灰命名委員会 (1982): 北海道の火山灰。札幌。23 pp.
- 北海道埋蔵文化財センター (1983): 川上B遺跡—北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書一。札幌。303 pp.
- Kuenen, Ph. H. (1956): Experimental abrasion of pebbles. 2. Rolling by current. *Jour. of Geology*, 64, pp. 336-368.
- 砂層性堆積物研究会編 (1983): 堆積物の研究法—礫岩・砂岩・泥岩—。地学団体研究会。東京。377 pp.
- 岡根 浩 (1981): 岩屑の移動による地形変化の予知。地形変化の数量的予知に関する研究連絡集報告書。pp. 11-17.
- Sneed, E. D. and Folk, R. L. (1958): Pebbles in the lower Colorado River, Texas—A study in particle morphogenesis. *Jour. of Geology*, 66, pp. 114-150.
- Washburn, A. L. (1979): *Geocryology—A survey of periglacial processes and environments*. Edward Arnold, London, 406pp.
- 横山 泉・勝井渡雄・大場与志男・江原幸雄 (1973): 有珠山—火山地質・噴火史・活動の現況および防災対策。北海道防災会議。札幌。254 pp.
- 吉川周作 (1976): 大板層群の火山灰について。地質雑。82, pp. 497-515.
- Zingg, Th. (1935): Beitrag zur Schotteranalyse—Die Schotteranalyse und ihre Anwendung auf die Glattalschotter. *Schweiz. Min. u. Pet. Mitt.*, 15 pp. 39-140.



B地区礫の立ちあがりの状況



B地区礫の検出状況

図版IIの4



H-100-C区の土層断面



P-2-d区の土層断面

### Ⅲ 遺物の分類

#### 遺物の分類

出土した遺物の分類は、従来、当埋蔵文化財センターが使用しているものによった（注1）。

この分類基準は、新千歳空港建設用地内における美沢川流域の遺跡調査の成果をもとに作成し、のち北海道縦貫自動車道江別地区の発掘資料により修正したものである。今回は、さらに北海道縦貫自動車道登別地区及び白老地区の発掘資料による追加をおこなっている（注2）。

土器は、縄文時代早期に属する資料をⅠ群とし、以下順次前、中、後、晩期を、Ⅱ群、Ⅲ群、Ⅳ群、Ⅴ群とした。統縄文時代や擦文時代に属する資料は出土していない。

石器等については、定形的な石器をⅠ群～Ⅷ群に分け、石器のつくりかたにかかわる石核、剥片類をⅨ群とし、定形的な石器としては認定しがたいものを、加工痕或使用痕のある剥片・礫としてⅩ群をもうける。その他の礫、石製品、土製品、骨角品、漆器、木製品などには、分類記号はない。

（注1）『社台1遺跡・虎杖浜4遺跡・千歳4遺跡・富岸遺跡』昭和55年度

（注2）『川上B遺跡』、『千歳5遺跡』、『虎杖浜3遺跡』昭和57年度

#### 土器

##### <Ⅰ群>

縄文時代早期に属する土器群 本群はa、bの2類に分類され、後者はさらにb-1、b-2、b-3、b-4の4類に細分される。

a類 貝殻文、条痕文のある土器群

b類 縄文、撚糸文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群。

b-1類 東鋼路Ⅲ式に相当するもの

b-2類 コッタロ式に相当するもの

b-3類 中茶路式に相当するもの

b-4類 東鋼路Ⅳ式に相当するもの

##### <Ⅱ群>

縄文時代前期に属する土器群 本群はa、bの2類に分類され、前者はさらにa-1、a-2の2類に細分される。

a類 縄文尖底土器群。

a-1類 網文土器とそれに伴う斜行縄文、羽状縄文、組紐回転文等の施された土器群

a-2類 春日町式、中野式に相当するもの

b類 円筒下層式に相当するもの。

<III群>

縄文時代中期に属する土器群 本群はa、bの2類に分類され、後者はさらにb-1、b-2、b-3類に細分される。

a類 円筒上層式に相当するもの

b類

b-1類 天神山式、見晴町式に相当するもの

b-2類 柏木川式、大安B遺跡出土資料に相当するもの

b-3類 北館式、ノグップ式、静狩式、煉瓦台式に相当するもの

<IV類>

縄文時代後期に属する土器群 本群はa、b、cの3類に分類される。

a類 余市式、入江式に相当するもの 入江貝塚第3貝層出土資料(注3)、鳥崎遺跡出土資料(注4)、大津遺跡B地点出土資料(注5)に相当するものと、涌元式、手稲砂山式(注6)に類似するものを含む。

b類 船泊上層式、手稲式および茶津洞穴IV層出土資料(注7)に相当するもの ウサクマイ遺跡群C地点出土資料(注8)に類似するものを含む。

C類 堂林式および茶津洞穴III層出土資料に相当するもの

<V群>

縄文時代晩期に属する土器群 本群はa、b、cの3類に分類される。

a類 大洞B式、大洞BC式に相当するもの 上ノ園式に類似するものを含む。

b類 大洞C<sub>1</sub>、大洞C<sub>2</sub>式に相当するもの

c類 大洞A式に相当するもの タンネットウL式を含む。

(注3) 名取武光・峠山雄 昭和33年 「入江貝塚」『北方文化研究報告』第13輯

(注4) 森町教育委員会 昭和50年 「鳥崎遺跡」

(注5) 松前町教育委員会 昭和49年 「松前町大津遺跡発掘報告書」

(注6) 石川徹 昭和42年 「札幌手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3

(注7) 小樽市博物館 昭和37年・昭和45年 「茶津洞遺跡群」

(注8) 千歳市教育委員会 昭和49年 「ウサクマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査」

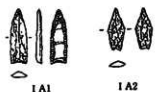


## 石器

## &lt;I群&gt; 石鏃・槍先類

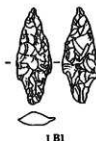
## A：石鏃

- 1：石刃鏃
- 2：細身で薄いもの 基部が内湾するものもある。
  - a：柳葉形のもの
  - b：五角形になるもの
  - c：大きめのもの
- 3：三角形のもの  
(基部にえぐりのあるものも含む)
- 4：茎が明瞭に見られないもの  
(ひし形のもの、基部が丸くなるもの)
- 5：茎をもつもの



## B：槍先・ナイフ

- 1：茎をもつもの
- 2：茎が明瞭に見られないもの  
(ひし形のものも含む)



- 8：破片など
- 9：今後分類を必要とするもの

## &lt;II群&gt; 石錐類

## A：石錐

- 1：刺突部をつくりだしたもの  
(刺突部が複数のももある)
- 2：棒状のもの
- 3：棒状のものにつまみ部がつくりだされたもの



- 8：破片など
- 9：今後、分類を必要とするもの

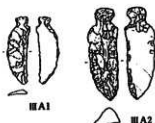
## &lt;III群&gt; ナイフ・スクレイパー類

## A：つまみ付きナイフ

- 1：二次加工が片面全体に施され、その面の右側縁に

急角度の刃部をもつもの

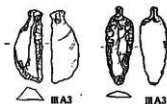
- 2: 二次加工が片面全体に施されるもの
- 3: 二次加工が周辺に施されるもの
- 4: 両面加工のもの
- 5: 横形のもの



- 8: 破片など
- 9: 今後、分類を必要とするもの

B: スクレイパー

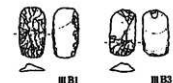
- 1: 石べらと称されるもの
- 2: まる形のもの (ラウンド・スクレイパー)
- 3: エンド・スクレイパー



- 8: 破片など
- 9: 今後、分類を必要とするもの

<IV群> 石斧

- 1: 擦り切り手法によって製作されたもの
- 2: 敲打痕 (ベッキング) のみられるもの
- 3: 打ち欠きによる整形のみられるもの
- 4: 素材を大きく変形することなく、刃部のみに磨き  
がみられるもの
- 5: 全面磨製のもの



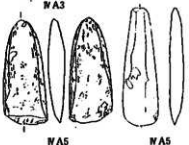
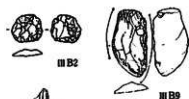
- 8: 素材, 未製品, 擦り切り残片, 破片など
- 9: 今後、分類を必要とするもの

B: 石のみ

<V群> たたき石, 台石頭

A: たたき石

- 1: 棒状の一端, もしくは両端にたたき痕がみられる  
もの
- 2: 扁平礫の周辺にたたき痕がみられるもの
- 3: 扁平礫の腹, 背面にたたき痕がみられるもの  
(くぼみ石と称されるものも含む)
- 4: 円礫状のもの



8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

B：白石（石器製作、その他の作業でテーブルとなったもの 出土状態などの状況証拠を重視）

1：白石（板状の面の平坦面に使用痕がみられるもの）

8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

<VI群> すり石・石皿類

A：すり石

1：断面がすみまる三角形の礫の稜をすったもの

2：扁平礫の側縁をすったもの

3：扁平礫を半円状に粗く打ち欠き弦をすったもの  
（今回は、出土していない）

4：北海道式石冠と称されるもの

5：円礫状で、すり面が曲面のもの（側面にたたき痕がみられるものが多い）

8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

B：石皿（すり面のあるもの）

1：石皿（板状の石の平坦面に、広くすり面がみられるもの）

8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

<VII群> 石鋸・砥石類

A：石鋸

1：石鋸（刃部が直線状になるもの）

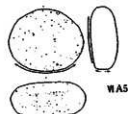
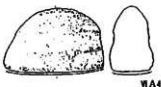
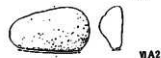
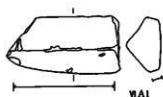
8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

B：砥石

1：研磨面に溝があるもの

2：板状のもの（破損したものが多い）



3：角柱状のもの（4面を使ったものが多い）

8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

〈VII群〉 石錘類（今回は出土していない）

A：石錘

1：打ち欠きを4ヶ所にもつもの

2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの

3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの

8：破片など

9：今後、分類を必要とするもの

〈IX群〉 石核・剥片類

A：石核（剥片石器の素材となる原石等も含む）

B：剥片・破片

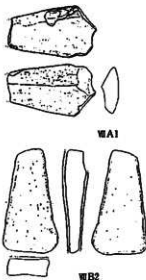
〈X群〉 加工痕・使用痕のみられる剥片・礫など

A：加工痕・使用痕のみられる剥片

1：剥片に加工痕が見られ、今後、分類を必要とするもの（定形的な石器としては認定されていないもの。彫器、ピエス・エス・キューと呼ばれるもの。それらの削片などを含む。）

2：剥片に使用痕のみられるもの

B：礫に加工痕・使用痕のみられ、今後、分類を必要とするもの



## IV A地区の調査

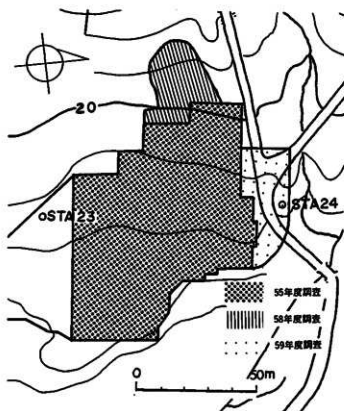
### 1 概要

A地区は、昭和55年度・58年度・59年度の3回に分けて調査をおこなった。年度別の調査区域は、図IV-1に示すとおりである。このうち、昭和55年度調査分については、すでに報告書を刊行している。

昭和58年度の調査区域は、昭和55年度調査区域の西側に接し、標高は20～23mである。55年度の成果から予想された縄文時代中期の資料が出土したが、数量は少ない。

昭和59年度の調査区域は、昭和55年度調査区域の北側に接する標高14～19mのところにある。55年度の成果から予想された、縄文時代早期の貝殻土器、撚糸土器や、縄文時代中期の円筒上層式土器などが出土している。

なお、昭和58年度にB地区を調査した際、A地区の55年度調査区の排土と考えられるところから石刃鏃を検出したので、これを55年度調査の補遺として、ここに加えておく。



図IV-1 A地区の年度別調査区域

## 2 昭和55年度調査の補遺

図IV-2は、55年度調査区の排土と考えられるところから検出した石器である。黒曜石製の石刃鏃とみなしうるもので、重量は0.8gである。幅1cm程度の石刃を、背面から主要剥離面側への二次加工によって形を整えている。基部の加工には、石刃鏃製作上の「くせ」と指摘されているものがある。すなわち、主要剥離面の側から背面へほぼ直角に近い加工がなされ、基部の平面視はゆるく内に曲がったものとなり、さらに背面には、基部から先端にむかう桶状剥離が認められる点である。

石刃鏃を検出したのは、下に示す55年度A地区作業状況の写真中、左手前にみえる排土が一部流下したところからである。55年度の調査時にこの場所に置かれた排土はM-13区付近のもので、石刃鏃はこの発掘区の付近から出土した可能性が高いと思われる。なお、55年度の調査では、このM-13区付近から、土器、石器などはほとんど出土していない。

川上B遺跡に近いところから得られた石刃鏃の資料としては、白老町虎杖浜のものが知られている。



図版IVの1

図IV-2 石刃鏃



55年度A地区の作業状況（左手前の排土から石刃鏃を検出）

## 参考文献

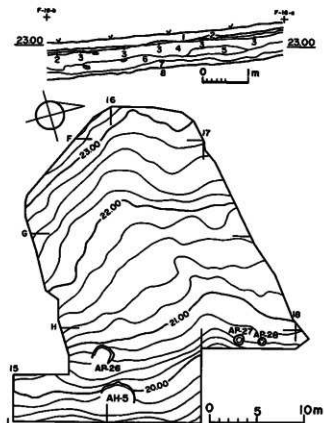
- 戸沢充則・鶴丸俊明 1969 「北見市川東羽田発見の石刃鍬とその遺跡」『考古学集刊』第4巻2号  
 佐藤一夫・工藤 肇 1980 「白老町発見の石刃鍬の新例について」『北海道考古学』第16輯  
 佐藤訓敏ほか 1983 「虎杖浜3遺跡」『北海道埋蔵文化財センター調査報告』第11集

## 3 昭和58年度の調査

## (1) 概要

調査区域は、昭和55年度の調査区の南側に接する標高20～25mの緩傾斜地にあたる。ここは、昭和55年度の調査時には用地問題未解決のために調査できなかったところである。土層の堆積状態は、図IV-3に示すとおりである。標準土層をふまえた今回の調査区の土層は次のようであった。

1層 耕作土。黒色腐植土層で、現代の陶磁器、鉄片等を包含している。最下層には降下火山灰が堆積している。



図IV-3 58年度調査区の最終面地形と遺構の位置・土層図

2層 黒色腐植土。縄文時代早期・中期の遺物包含層である。色調、粒度の違いからI層との区別は明瞭である。

3層 黄褐色土。II層からIV層への漸移層である。

4層 黄褐色粘土。無遺物である。

なお、発掘区の16ラインより北側では、II層以下に、最大径1.5mの礫が散在していた。このような礫についてはII章で触れている。

遺物は縄文時代早期と中期の土器片、および石器等が出土している。遺構は、縄文時代中期のものと考えられる住居跡と土壇を検出した。

## (2) 遺構とその遺物

AH-5

位置 H-16-6

規模 (3.50) × (3.00) × 0.20

土層説明：1層-黒色土。2層-黒色土。少量のローム層が混じる。3層-暗褐色土。かたくしまっている。4層-黒色土。黄褐色粘土が混じり、ボロボロしている。5層-黒色土。炭化物・焼土を含む。6層-黒色土。軟かくボロボロしている。7層-黒色土。焼土を含む。

特徴 床面は平坦で、壁の立ち上がりは明瞭である。ただし、傾斜地に構築されているため東側の壁は検出することができなかった。平面形は、ほぼ円形になるものと思われる。床面中央部には炭化物と焼土がわずかにみとめられた。柱穴と思われる小ピットが2個検出されている。覆土は、黒色土と黄褐色土の混土層で、床面近くや壁際では、軟かくボロボロしていた。

遺物 覆土中から、III群b-1類およびIII群b-3類の土器片が出土した(図IV-4、1-9)。

AP-26

位置 H-15-d、H-16-a

規模 (2.20) × (2.00) × 0.10

土層説明：1層-暗灰褐色土。盛土である。2層-黒色土。3層-淡黒褐色土。4層-暗茶黄色土。ローム層を含む。5層-黒色土。炭化物を含む。6層-暗黄色土。汚れた感じ。

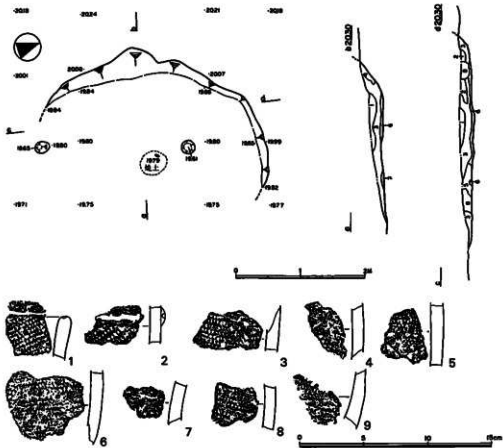
表IV-1 AH-5掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位
1	土器	III b-1	覆土
2	"	III b-3	"
3	"	"	"
4	"	"	"
5	"	"	"
6	"	"	"
7	"	"	"
8	"	"	"
9	"	"	"

表IV-2 AP-26掲載遺物一覧表

番号	名称	分類	層位
1	土器	III b-3	覆土
2	"	"	"
3	"	"	"





図IV-4 AH-5とAH-5出土の遺物

特徴 AH-5に隣接している。床面は、ほぼ平坦で、壁は確認面まで10cmほどしか立ち上がりが残っていない。傾斜地に構築されているため、東側の壁は検出することができなかった。床面には焼土がみつめられた。覆土は二層に区分される。上層には黒色土、下層には黒色土と黄褐色土の混土が堆積している。AP-26は焼土があるところからみると、住居跡の可能性も否定できない。しかし、遺物が少なく、規模が小さいことから、ここでは土壇として扱った。

AP-27

位置 H-17-a

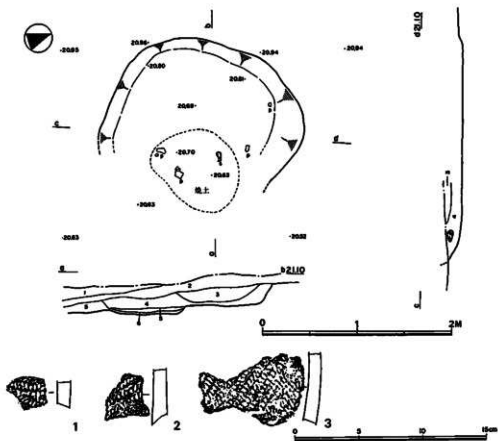
規模 1.10×0.80×0.45

土層説明：1層-黒色土。2層-暗灰色土。3層-暗黄色土。

特徴 平面形は楕円形である。墳底部はIV層まで掘り込まれ、壁は急角度で立ち上がる。

遺物 覆土中から人頭大の礫と、III群b-3類の土器片が出土した。

AP-28



図IV-5 AP-26とAP-26出土の遺物

位置 H-17-d

規模 0.80×0.70×0.45

特徴 平面形は楕円形である。IV層まで掘り込まれている。AP-27と規模、形状が似ているが、壁はより急角度で立ち上がる。

遺物 墳底部より10 cmほど上部から、III群b-1類の土器底部が出土した(図IV-6-1)。

表IV-3 AP-28掲載遺物一覧表

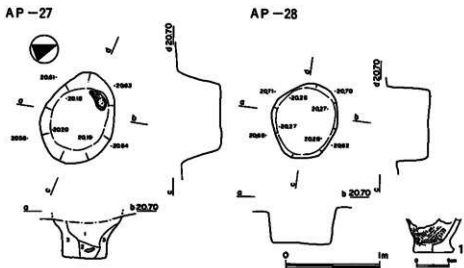
番号	名称	分類	層位
1	土器	III群b-1	覆土

### (3) 包含層の遺物

#### (イ) 土器 (図IV-7)

I群(2-8) 2はI群b-2類の口縁部破片である。3-8はI群b-3類に相当するもので、3は口縁部破片、他は胴部破片である。

III群b-1類(9-11) 9は口縁部破片で、口唇上にも施文されている。他は胴部破片である。焼成は良好で、色調は明褐色である。



図IV-6 AP-27・AP-28

Ⅲ群b-2類(12~19) いずれも内面が研磨された土器である。13~15は同一個体と思われる。

Ⅲ群b-3類(1, 20~34) 20~34は口唇と口縁の貼付上に竹管様の施文具で刺突が施されるもので、1は、同じく口縁の貼付上に縄線文が施文されている土器である。口縁部の直径は40cm程度と推定される。なお、昭和55年度の報告中、図版IV-14に掲載されている201の土器は、これと同一個体である。

#### (ウ) 石器(図IV-8)

石鏃(1) 二次調整は、周辺部のみみられ、一次刺離面を大きく残している。

つまみ付きナイフ(2) 上半部を欠損している。背面右側縁に顕著な使用痕がみられる。

スクレイパー(3) 片面調整である。背面には荒い敲打が加えられている。

たたき石(4) 円盤状の礫を用い、周辺に敲打を加えている。

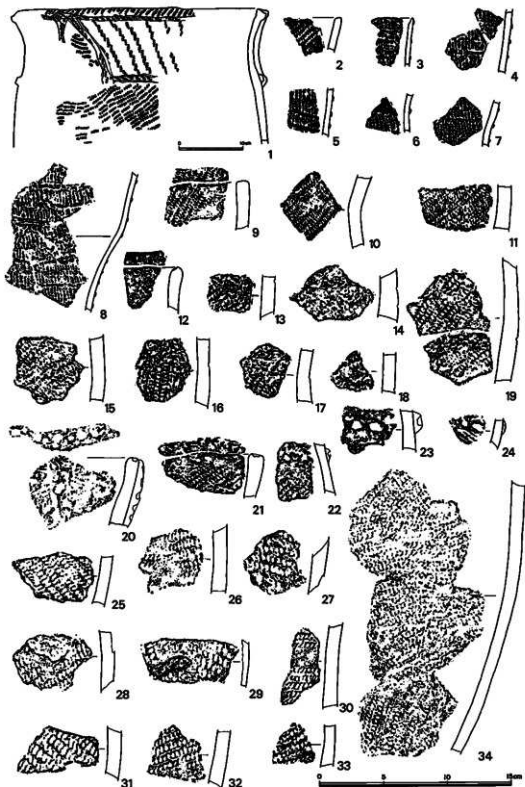
砥石(5) 裏衣両面のほか、側面にも研磨がみられ、数面の使用面をもつ砥石である。

石斧(6) 未製品である。研磨が不十分で、刃部の形成に至っていない。

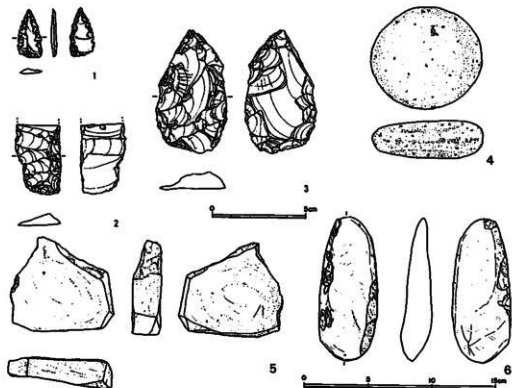
#### (4) まとめ

A地区の調査面積は710m<sup>2</sup>、遺物点数は約400点である。検出した遺構は、住居跡1ヵ所、土坑3ヵ所で、これらは発掘区のHラインより東側に分布している。遺構はⅢ層ないしⅣ層で確認したものであるが、掘り込み面は特定できなかった。

AH-5とAP-26は焼土の存在から生活遺構と思われるが、はっきりしない。また、相伴する遺物が皆無であるので時期決定が困難である。しかし、遺構周辺から出土している遺物が縄



図IV-7 包含層出土の土器



図IV-8 包倉層出土の石器

文時代中期のものであることから、これに近い年代を与えることができるともわれる。

AP-28は出土遺物から縄文時代中期の遺構ともわれる。AP-27もAP-28に隣接し、規模・形状が似かよっているところから同時期のものであろう。

出土遺物の大部分を占めるものは、縄文時代中期のサイベ沢Ⅶ式～ノグッⅡ式に相当する土器である。このほか、縄文時代早期のコックロ式～中茶路式と思われる土器がわずかに出土している。遺物の分布は希薄であるが、おおむね遺構周辺に集中する傾向を示している。

表Ⅳ-4 A地区(58年度)掲載土器の説明表

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	Ⅲb-3	H-16-a	18	Ⅲb-2	H-17-a
2	Ib-2	F-16-b	19	"	"
3	Ib-3	"	20	Ⅲb-3	G-17-b
4	"	"	21	"	H-15-d
5	"	"	22	"	H-17-a
6	"	"	23	"	H-16-a
7	"	"	24	"	H-17-a
8	"	I-15-c	25	"	H-15-d
9	Ⅲb-1	G-17-b	26	"	H-16-a
10	"	"	27	"	H-17-a
11	"	F-16-b	28	"	H-15-d
12	Ⅲb-2	H-15-c	29	"	H-16-a
13	"	H-17-a	30	"	"
14	"	"	31	"	H-15-d
15	"	"	32	"	H-16-a
16	"	"	33	"	H-15-d
17	"	G-17-b	34	"	"

表Ⅳ-5 A地区(58年度)掲載石器の説明表

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質
1	石 鏃	IA3	I-15-c	0.8	黒曜岩
2	つまみ付きナイフ	ⅢA1	H-15-c	5.0	頁 岩
3	スクレイパー	ⅢB1	H-15-d	25.5	"
4	たたき石	VA2	G-16-b	250	安山岩
5	砥 石	ⅣB2	H-16-b	115	砂 岩
6	石 斧	ⅣA4	H-15-c	150	緑色泥岩



58年度 A 地区完掘



A H-5 完掘

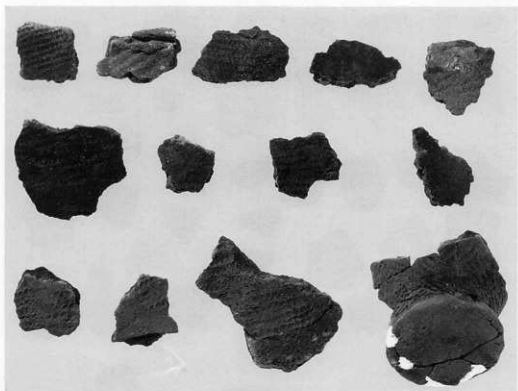


A P-26 遺物出土状況

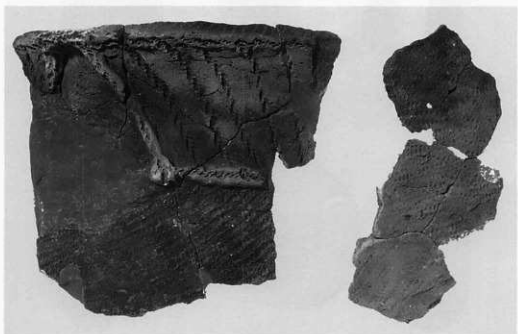


A P-26 完掘

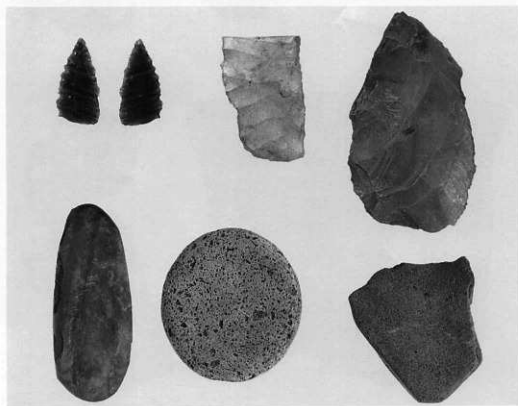
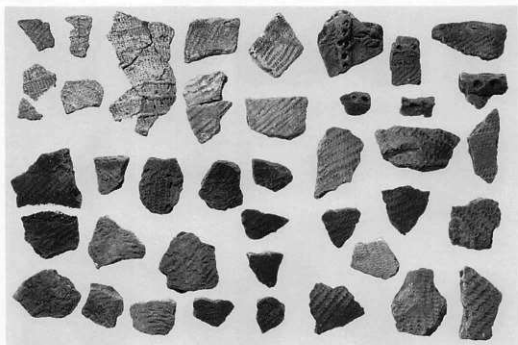




遺構出土の土器



包含層出土の土器



包含層出土の土器・石器

## 4 昭和59年度の調査

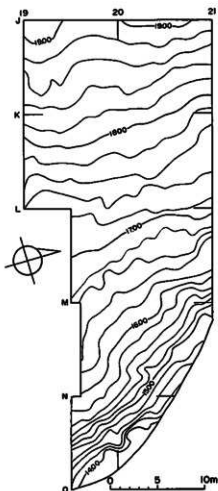
(1) 概要 昭和59年度の調査区域は、図IV-9に示すように標高14~19mのところにある。ここは50ページ(上)や巻頭の3の写真、あるいは図IV-1の地形図にみられる道路、民家を含むために、昭和55年度の調査では繰り返していた部分である。

土層の堆積状態は、図IV-10に示すとおりである。道路部分は、たび重なる補修や砂利の投入によって包含層が削平されており、遺物の出土はごく少量であった。

(2) 出土遺物 縄文時代早期と中期の遺物が出土している。

(イ) 土器 縄文時代早期の貝殻条痕文土器、撫糸文土器、中期の円筒上層式土器などが約1,500点出土しているが、小さな破片が多い。図示にあたっては、型式の特徴がよくあらわれている口縁部破片を主体とした。

早期の貝殻条痕文土器(1~56) 出土した破片のほとんどを図示してある。口縁部破片や



図IV-9 59年度調査区の最終面地形

底部破片をもとに推定した個体数は、5個以下である。このうち、口縁部から底部までそろっていると考えられるものは、2個体ある。ひとつは1・2・3・7・9・15・16に示された個体であり(以下これを〔16〕の個体と呼ぶ)、他のひとつは24・25・33・56に示された個体である(以下これを〔56〕の個体と呼ぶ)。

〔16〕の個体はL-20-b区とN-19-d区から出土しているが、胎土、焼成などきわめて類似しているため、同一個体とみなした。底部は、16にみられるように貝殻圧痕(ホタテ貝?)をもつ、かるいあげ底である。胴部の外面には縦方向の、内面には横方向の条痕が残っている(7・9・15など)。口縁部は、1・2・3にみられるようにほぼ水平であり、器面には内外ともに横方向の条痕が残っている。口唇断面は内側に傾いており、この傾きははじめるところに内面から外面へ向けて施した直径3mmの円孔が2.5cmほどの間隔でつづいていると考えられる。

23の底部は外面が剥落しているが、16と類似したかるいあげ底の可能性が認められる。

〔56〕の個体は、図IV-11にみるようにL-20-a区とL-20-d区とにまたがる径2mほどのせまい範囲から出土したものである。風倒

木による擾乱を受けてはいるが、周囲には類似した土器はほとんどなく、平面的には良好なまとまりを示している。底部は56にみるように平底である。口縁部は24・25のようにほぼ水平であり、口唇断面は直立している。25から推定した口縁の直径は、約17cmになる。口縁部の円孔は外面から内面へ向けて施文され、直径2mmで、1cmほどの間隔を示している。器面の条痕は、内外ともに不明瞭である。

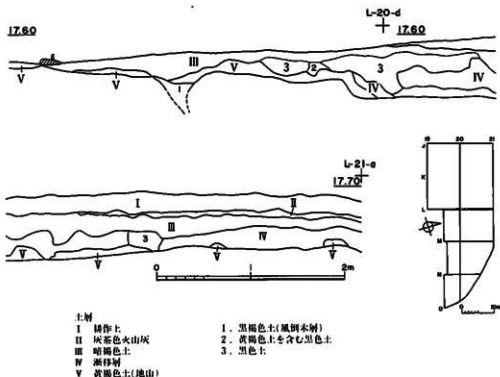
[56]の個体に類似しているものには39・41・49からなる個体がある。これはJ-20-a区から出土している。

28の円孔は、焼成後の補修孔である。

早期の捲糸文土器(57-74) 東銅路Ⅲ式(58・59・60など)、コッタロ式(63など)、東銅路Ⅳ式(69・73など)があり、口縁部破片をもとに推定した個体数は、10個以下である。調査区域の縁辺部から出土した破片が多いが、このような分布状態は、道路部分で包含層の残存状態が悪いためと思われる。なお、69は、J-19-c区の道路敷のわだちのくぼみから、55ページ(下)の写真にみられるような破片となって出土したものである。

中期の土器(75-103) 円筒上層式(75・76など)のように型式的特徴の明らかなものほかに、小破片ということもあって土器型式がわかりづらいものが、口縁部破片で15点ほどある。

(c) 石器 石器は、石鏃、石槍、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、す



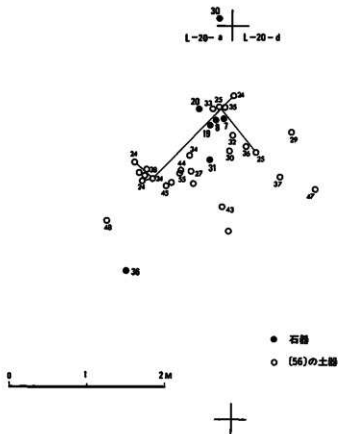
図Ⅳ-10 土層断面

り石などが出土しており、すべて図示してある。

このうち、土器との伴出関係が明らかなのは、7・8・19・20のスクレイパー、31の石斧である。以上の5点は、図IV-11にみられるように土器〔56〕の個体の分布範囲（L-20-a区、L-20-d区）から出土している。31の石斧としたものは、緑色泥岩を加工したものであるが、研磨された明瞭な刃部はない。30は、31と1.8 mほど離れた位置から出土しているが、31と同様に緑色泥岩を刃部の研磨がみられない程度に加工してあるので、同時期の石器と考えられる。刃部の形成が不充分なところから考えると、この2点が実用品であった可能性はひくい。

36は、石斧の加工途中と考えられるもので、緑色泥岩の礫に周辺からの剝離がみられる。これも〔56〕の土器に伴う可能性がある。

34・42・46・48の4点は、図版IVの7の(上)にみられるような出土状態であった。42・46・48の3点は、縄文時代早期に多くみられるすり石である。このようなすり石の集中する様子は、強い人為性を推測させるが、その周囲の精査にもかかわらず、明瞭な遺構を検出することはできなかった。



図IV-11 石器と〔56〕の土器の出土位置

図版IVの6



A地区作業状況(1980年春。道路の近辺は1984年夏に調査した)



A地区作業状況(1984年夏)

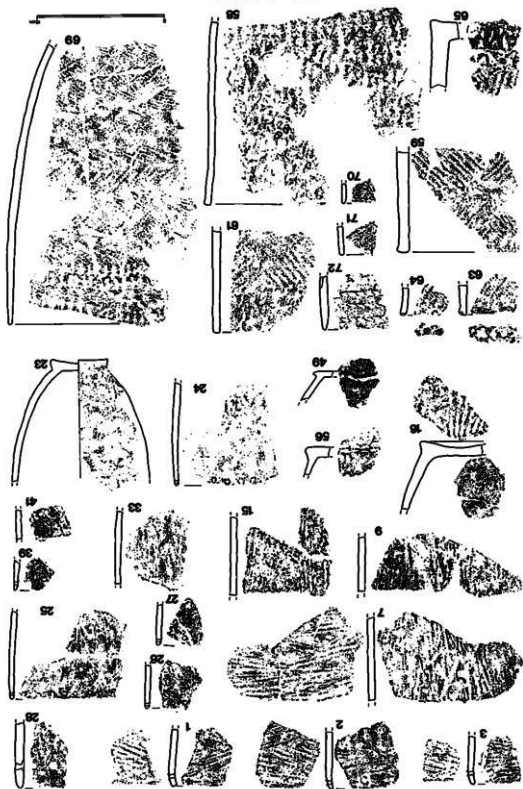


遺物の出土状況

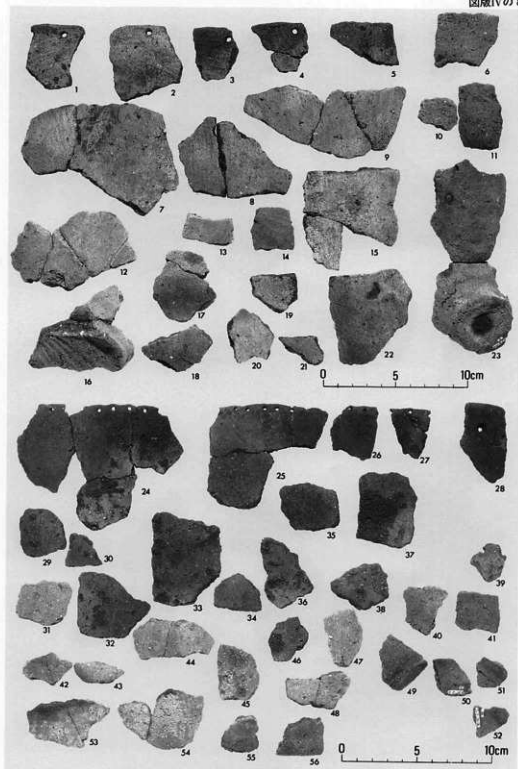


A地区 発掘

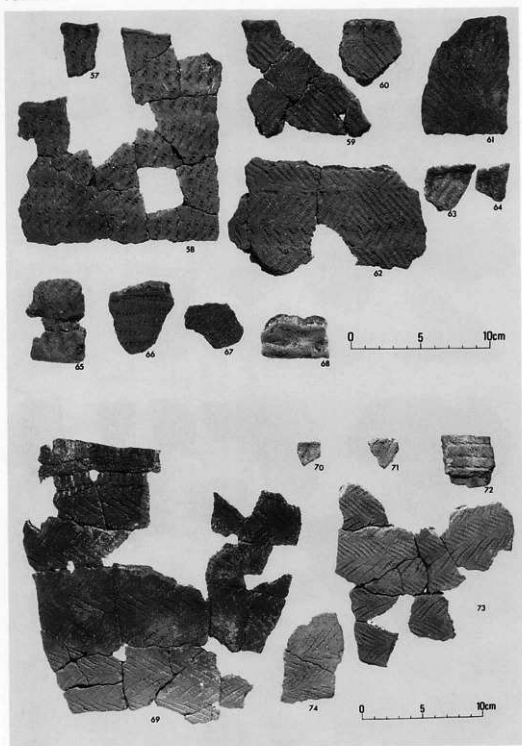
图 IV-12 土器标本



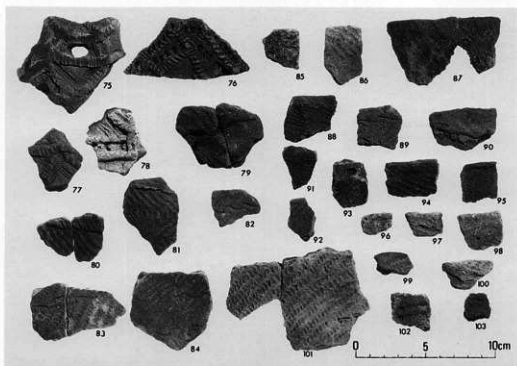




包含層出土の土器



包含層出土の土器



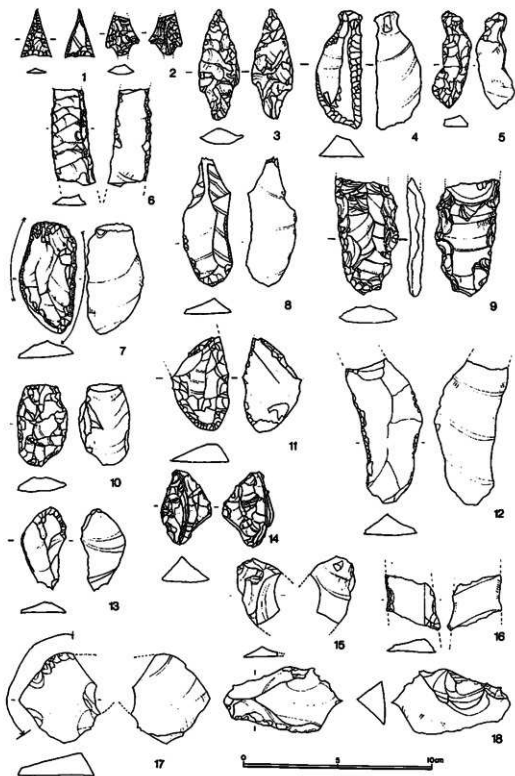
包含層出土の土器



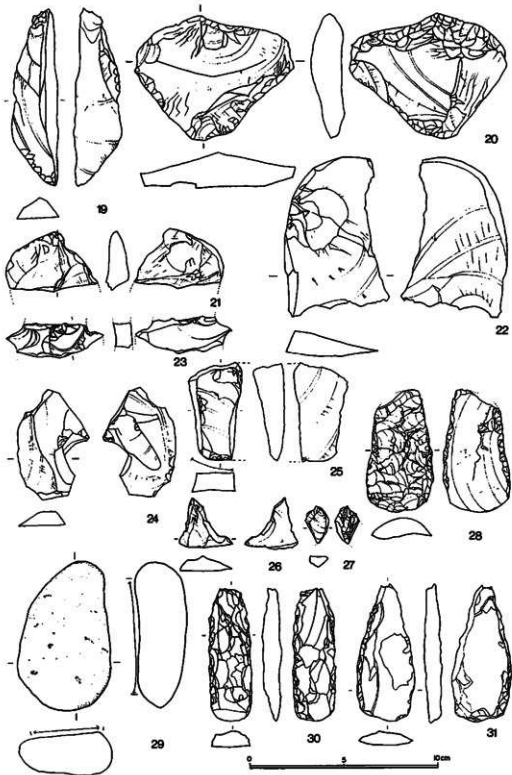
道路部分からの土器出土状況

表Ⅳ-6 59年度A地区出土の土器説明表

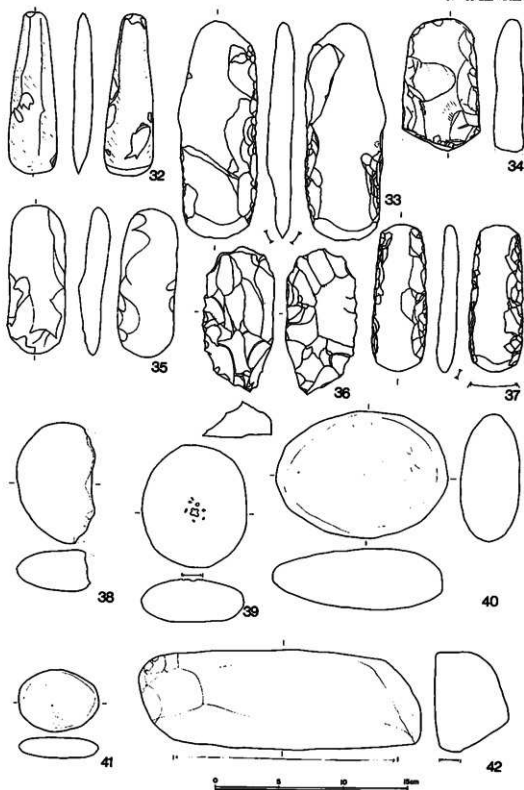
番号	分類	発 掘 区	番号	分類	発 掘 区
1	Ia	N-19-d	53	Ia	L-20-a
2	Ia	N-19-d	54	Ia	L-20-a
3	Ia	N-19-d	55	Ia	L-20-a
4	Ia	N-19-d	56	Ia	L-20-a
5	Ia	N-20-a	57	Ib-1	N-20-a
6	Ia	N-19-c	58	Ib-1	N-20-a
7	Ia	N-19-d	59	Ib-1	N-19-d
8	Ia	N-19-d・N-20-a	60	Ib-1	N-19-d
9	Ia	N-19-d・N-20-a	61	Ib-1	N-20-a
10	Ia	N-19-c	62	Ib-1	N-19-d・N-20-a
11	Ia	N-19-c	63	Ib-2	K-20-c
12	Ia	L-20-b	64	Ib-2	K-20-c
13	Ia	N-19-d	65	Ib-1	N-19-d
14	Ia	N-19-d	66	Ib-1	L-20-c
15	Ia	N-20-a	67	Ib-2	N-19-d
16	Ia	L-20-b	68	Ib-2	J-20-a
17	Ia	L-20-b	69	Ib-4	J-19-c
18	Ia	N-19-d	70	Ib-2	N-19-d
19	Ia	N-19-d	71	Ib-2	N-19-d
20	Ia	N-19-d	72	Ib-4	L-20-b
21	Ia	N-19-d	73	Ib-4	N-19-d・N-20-a・K-20-c
22	Ia	N-19-d	74	Ib-4	N-19-c
23	Ia	N-19-d	75	IIIa	M-20-b
24	Ia	L-20-c・L-20-d	76	IIIa	L-20-c
25	Ia	L-20-c・L-20-d	77	IIIa	N-20-a
26	Ia	L-20-c	78	IIIa	N-19-d
27	Ia	L-20-a	79	IIIb	L-20-a
28	Ia	K-20-c	80	IIIa	M-20-b
29	Ia	L-20-d	81	IIIa	N-20-a
30	Ia	L-20-a	82	IIIb	J-20-c
31	Ia	L-20-a	83	IIIa	J-20-a
32	Ia	L-20-d	84	IIIa	J-20-d
33	Ia	L-20-a	85	IIIb	J-20-a
34	Ia	L-20-a	86	IIIb	L-20-c
35	Ia	L-20-a	87	IIIb	K-20-c・K-20-d
36	Ia	L-20-d	88	IIIb	J-20-a
37	Ia	L-20-d	89	IIIb	J-20-c
38	Ia	L-20-a	90	IIIb	L-20-b
39	Ia	J-20-a	91	IIIb	J-20-a
40	Ia	J-20-a	92	IIIb	K-19-a
41	Ia	J-20-a	93	IIIb	L-20-a
42	Ia	L-20-a	94	IIIb	J-20-a
43	Ia	L-20-a	95	IIIb	J-20-a
44	Ia	L-20-a	96	IIIb	J-20-a
45	Ia	L-20-a	97	IIIb	J-20-a
46	Ia	L-20-a	98	IIIb	J-20-a
47	Ia	L-20-d	99	IIIb	J-20-a
48	Ia	L-20-a	100	IIIb	J-19-d
49	Ia	J-20-a	101	IIIb	L-20-a
50	Ia	J-20-a	102	IIIb	M-20-a
51	Ia	J-20-a	103	IIIb	J-20-a
52	Ia	J-20-a			



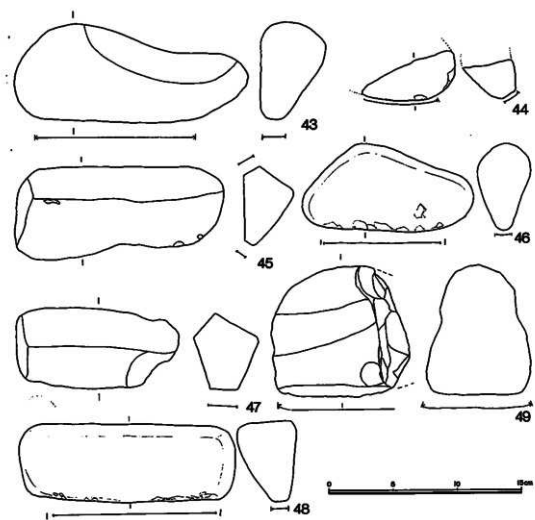
図IV-13 包含層出土の土器



図Ⅱ-14 包含層出土の石器



図IV-15 包倉層出土の石器

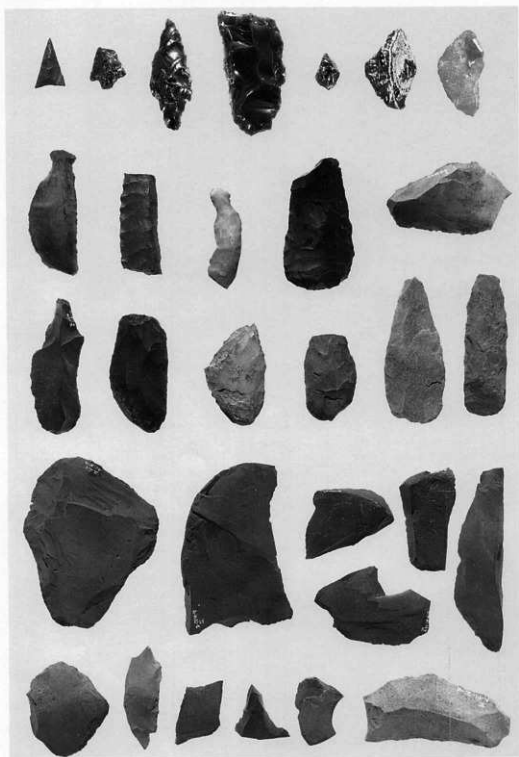


図IV-16 包含層出土の石器

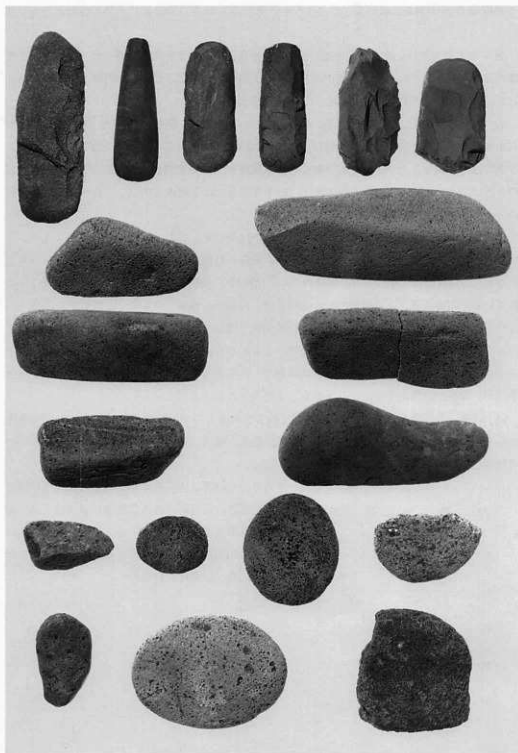


表IV-7 59年度A地区出土の石器説明表

番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質
1	石 鏃	IA 3	J-20-a	0.7	暗紅色頁岩
2	"	IA 5	J-20-a	1.5	黒曜石
3	石 槍	IB 1	J-19-a	8.1	黒曜石
4	つまみ付ナイフ	III A 3	表 掻 拂 土	17.1	頁岩
5	"	"	M-20-d	5.3	白色頁岩
6	"	III A 1	M-20-a	8.2	頁岩
7	スクレイパー	III B 9	L-20-a	18.3	頁岩
8	"	"	L-20-a	14.0	頁岩
9	"	"	K-20-c	21.0	黒曜石
10	"	"	K-20-b	9.9	頁岩
11	"	"	N-19-c	12.0	頁岩
12	"	"	M-20-d	25.5	頁岩
13	使用痕のある剥片	XA 2	M-20-d	4.7	頁岩
14	スクレイパー	III B 9	L-20-a	16.0	黒曜石
15	剥 片	IX B	L-20-a	4.5	頁岩
16	使用痕のある剥片	XA 2	L-20-d	6.3	頁岩
17	"	"	L-20-d	20.6	頁岩
18	スクレイパー	III B 9	J-20-c	23.0	頁岩
19	"	"	L-20-a	23.8	安山岩
20	"	"	L-20-a	82.9	安山岩
21	剥 片	IX B	L-20-d	23.7	安山岩
22	"	"	K-20-c	54.8	安山岩
23	"	"	N-19-c	10.6	珪質頁岩
24	"	"	N-19-c	12.2	安山岩
25	"	"	L-20-d	24.4	安山岩
26	加工痕のある剥片	XA	L-20-b	4.6	頁岩
27	"	"	K-20-c	1.2	黒曜石
28	スクレイパー	III B 1	N-19-c	25.5	頁岩
29	加工痕のある礫	XB	N-19-c	51.3	軽石
30	石 片	IVA 9	L-20-a	20.9	緑色泥岩
31	"	"	L-20-a	23.4	緑色泥岩
32	"	VA 5	J-20-d	121.4	緑色泥岩
33	"	VA 3	L-20-c	240.0	砂岩
34	"	VA 8	M-19-d	260.0	緑色泥岩
35	"	"	N-19-d	192.9	砂岩
36	"	"	C-20-a	169.7	緑色泥岩
37	"	"	L-20-a	126.7	緑色泥岩
38	た た き 石	VA 3	N-20-a	245.0	安山岩
39	"	"	N-20-a	330.0	安山岩
40	"	"	表 掻 拂 土	850.0	安山岩
41	"	VA 2	L-20-d	72.7	安山岩
42	す り 石	VA 1	M-19-d	1,640.0	安山岩
43	"	"	N-20-a	690.0	安山岩
44	"	"	N-20-a	104.7	安山岩
45	"	"	L-20-c	810.0	安山岩
46	"	"	M-19-d	480.0	安山岩
47	"	"	K-20-d	550.0	安山岩
48	"	"	M-19-d	770.0	安山岩
49	"	VA 4	N-19-c	1,120.0	安山岩



包食層出土の石器



包含層出土の石器

## 5 小括

昭和55年度の調査で繰りこしたところを、58年度、59年度の2回にかけて調査をおこなった。

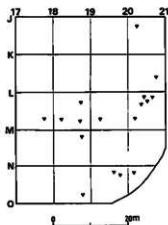
58年度の調査では、縄文時代中期の住居跡1か所、ピット3か所を検出した。土器は、55年度の成果から予想された縄文時代中期のものが、個体数にして8個ほど住居跡の周囲から出土した。縄文時代早期の燃糸文土器も、2個体分出土している。

59年度の調査では、縄文時代早期、中期の遺物が出土した。早期の土器で、55年度の調査から出土が予想された貝殻条痕文土器は、口縁部の円孔に特色がある。この貝殻条痕文土器は、5個体ほどを識別したが、これらの破片の分布状態を、55年度調査分とあわせると、図IV-17のようになる。これらの土器の個体数は、55年度調査では7個体と推定しており、59年度のものも含めても12個体にすぎない。

この貝殻条痕文土器は、器形を復原できたものはないが、器形、文様などの特徴は次のようになる。底部は、平底かかるいあげ底である。底部の外面に貝殻圧痕（ホクテ貝?）を残すものもある。口縁部は水平であり、口唇のちかくに直径2～3mmの円孔が1列の連点状に穿たれているものもある。この口唇ちかくの円孔は、内側から外側へのものと、外側から内側へのものの二種があり、この施文状態は、直径や円孔の間隔などととも個体ごとにほぼ一定しているものと考えられる。検出した破片は小さなものが多いが、接合した破片から口縁部の直径を17cmと推定したものがある。器面の状態は、内外ともに貝殻条痕がよく残っているものが多いが、なかには指頭圧痕により条痕がうすれたものもある。

以上に述べた特徴をもつ土器で、同型式とみなされるものが、昭和57年度に調査したG地区からも出土している。口縁部の円孔をはじめ、胎土、厚さ、器面調整、焼成の具合などきわめて類似している。

さらに、口縁部に円孔をもつ土器で縄文時代早期の類例としては、白老町虎杖浜3遺跡C地点出土品、苫小牧市有珠川2遺跡III B層出土品、静内町駒場7遺跡のPH-20出土品、函館市中野A遺跡の刺突文と呼称されたものなどがあげられる。



図IV-17 貝殻条痕文土器の出土位置

## V B地区の調査

### 1 概要

B地区は、昭和55年度に発掘調査をおこなったA地区の南側に接し、標高は、15~25 mである。ヤンケシ川右岸の平坦地と、それからつづくゆるやかな斜面の部分である。今回の発掘によって、調査区の南端と、中央部北寄りとに、西から東へむかって流れる三筋の小沢が確認された(図V-1)。これら三本の沢筋には、図II-1に示すように大小の角礫が多量にみられ、背後の山からの伏流水の流路となっている。

調査に着手したときは、荒地になっていたが、昭和54年秋の試掘調査のときは、乳牛用の飼料畑であった。この耕作による表土の移動は、不陸ならしにちかいかのものであったらしく、沢筋の耕土は深いところで70 cm、丘部分で耕土の浅いところは5 cmほどであった。平坦地での土層の堆積状態は図II-7に示すとおりである。標準土層をふまえたB地区の土層は、次のようであった。

I層 耕作土。黒色腐植土層で厚さ30 cm。開拓時以降の陶磁器片や、耕作によって混入した縄文時代の遺物が、わずかに含まれている。最下層には、暗灰色砂質や淡灰褐色の降下火山灰層の堆積がみられるところもある。

II層 黒色腐植土。厚さ約20 cm。縄文時代の遺物包含層である。

III層 暗黄褐色土。厚さ約10 cm。II層からIV層への漸移層である。

IV層 黄褐色粘質土。調査区内の一部を50~100 cmほど掘り下げてみたが、遺物は出土しなかった。N・O-3・4・5区では、この層が耕土となっていた。

検出された遺構は、ピット13ヵ所、小ピット5ヵ所、焼土1ヵ所である。ピットは調査区域南東部の平坦地と、中央部北寄りにある小沢縁辺の平坦部に分布している。これらの遺構の掘り込み面を確認することはできなかったが、覆土のセクションなどからみて、II層中から掘り込まれたものと考えられる。

遺物は約5,800点出土した。土器は、縄文時代早期・中期のものがほとんどで、なかでも円筒上層式に相当するものが多い。早期の土器には、貝殻文尖底の住吉町式土器、燃糸文平底の東鋼路III式土器などのほかに、東鋼路IV式土器とみなされる魚背回転文土器もある。

石器は、石鏃、石鏃、つまみ付きナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、白石、石匙、砥石、石錘などがある。

### 2 遺構とその遺物

BP-1 (V-2図)

位置: S-5-b

規模: 0.68×0.56×0.23 m

土層説明：1層-褐灰色土。砂質で、固くしまっている。2層-黒色土。3層-黒茶灰色土。黄色土と火山灰が混じる。4層-暗茶灰色土。下部に炭化物が混じる。5層-茶黄色土。6層-茶黄色土。5層と同質だが、多量の黄色土が混じっている。

遺物：覆土中から北海道式石冠1点(図V-6・1)と土器の小片が3点出土している。この石冠は、ピットの南壁に接した状態で発見された。石冠の大きさは、11×9.5×6.5 cmで、石質は安山岩である。土器片は、ピット西側の覆土上部から3点出土した。いずれも、縄文時代中期の土器の胴部破片である。

BP-2 (図V-2)

位置：S-4-b

規模：0.91×0.74×0.23 m

土層説明：1層-黒色土。2層-黒色土。黄色土の細粒が混じっている。3層-暗黒茶色土。固くしまっている。3層-暗黒茶色土。3層と同質だが、土はしまっていない。4層-黒色土。暗黄色土がブロック状に混入している。5層-暗黒褐色土。

遺物-墳底から、台石1点が出土した。大きさは30×26×14 cm。石質は、安山岩である。

BP-3 (図V-2)

位置：S-4-C

規模：0.80×0.54×0.22 m

土層説明：1層-暗黒褐色土。粘性が強い。2層-暗褐色土。3層-暗灰色土。粘性が強い。4層-暗褐色土。軽石がわずかに混じっている。5層-暗茶褐色土。暗黄色土が多量に混じっている。

遺物：覆土中から、北海道式石冠1点(図V-6・2)が出土した。この石冠は、ピットの北壁に接した状態で発見された。大きさは、12.5×9.0×7.0 cmで、石質は、安山岩である。

BP-4 (図V-2)

位置：S-4-C

規模：0.74×0.54×0.22 m

土層説明：1層-暗黒褐色土。2層-黒色土。3層暗茶灰色土。

遺物：出土していない。

BP-5 (図V-2)

位置：S-4-C

規模：推定0.9×0.8×0.2 m

北側は攪乱によって確認できなかったが、北東-南西方向に長い楕円形と推定される。

遺物：床面から、北海道式石冠1点(図V-6・3)と台石1点(図V-6・4)が出土している。大きさは、石冠が7.5×8.3×5.5 cm(現存)、台石は25.0×17.0×11.0 cmである。石質は、両者とも安山岩である。

BP-6 (図V-2)

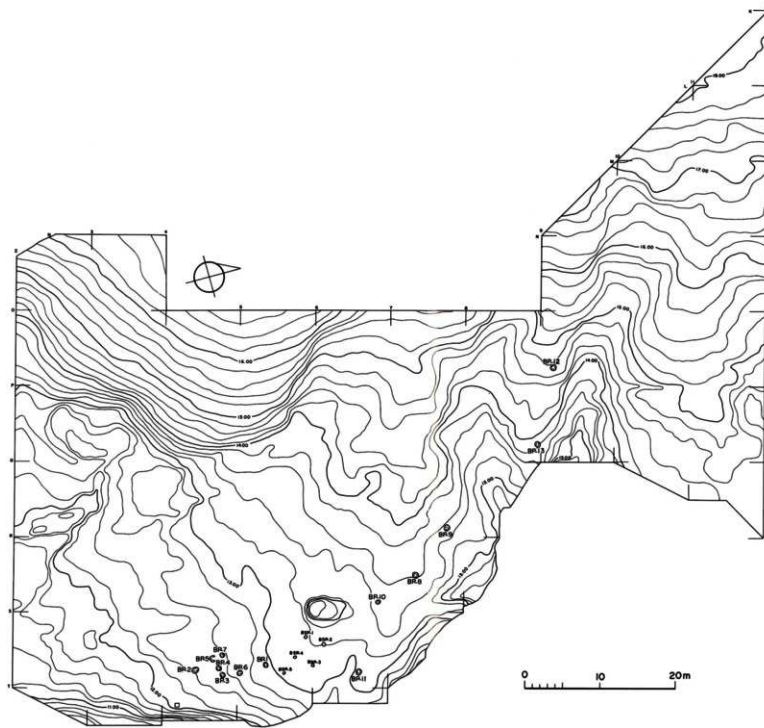


図 Y-1 B地区最終面地形と遺構の位置

位置：S-5-b

規模：0.63×0.54×0.11 m

土層説明：1層-黒色土。わずかに軽石が混じっている。2層-暗茶灰色土。3層-暗黒色土。4層-茶灰色土。5層-暗茶黄色土。6層-暗茶褐色土。

遺物：出土していない。

BP-7 (図V-3)

位置：S-4-C

規模：0.64×0.55×0.42 m

土層説明：1層-黒色土。2層-暗褐色土。3層-暗茶褐色土。4層-暗黄灰色土。粘性が強い。5層-淡茶褐色土。粘性が強い。

遺物：ピットの床面から、北海道式石冠1点(図V-6・5)が出土した。大きさは13.3×7.4×8.5 cm。石質は、安山岩である。

BP-8 (図V-3)

位置：R-7-a・b

規模：0.66×0.62×0.22 m

土層説明：1層-茶灰色土。2層-暗茶灰色土。3層-砂質茶灰色土。

遺物：出土していない。

BP-9 (図V-3)

位置：Q-7-C

規模：0.73×0.61×0.29 m

土層説明：1層-黒色土。2層-褐色土。固くしまっている。3層-黒色腐植土。木根による攪乱がある。

遺物：東側の壁に接した状態で北海道式石冠1点(図V-6・6)が出土した。また、覆土中から径30 cmほどの角礫1点が出土している。角礫は、外から流れこんだものと思われる。石冠の大きさは、11.3×8.1×9.7 cmである。石質は、安山岩。

BP-10 (図V-3)

位置：R-6-C

規模：0.52×0.45×0.08 m

土層説明：1層-暗褐色土。2層-暗褐色土。黄色土がブロックに混じっている。3層-淡茶灰色土。固くしまっている。

遺物：東壁の立ち上がり際から、北海道式石冠1点(図V-6・7)が出土した。大きさは、11.4×8.2×6.8 cm。石質は、安山岩である。

BP-11 (図V-3)

位置：S-6-C

規模：0.85×0.80×0.22 m。ベンチ状の段をもつ。



土層説明：1層-淡茶褐色土。砂質。2層-淡褐色土。炭化物の細粒がこくわずか混じっている。3層-少量の軽石と炭化物の細粒が混じっている。4層-暗黄灰色土。

遺物：覆土中から大小の礫が多量に出土した。使用痕や加工痕のあるものはない。小礫のまとまりの上に大きな礫が置かれているようにみえる。遺物からみると、ほかの12カ所のピットとは、性格を異にしているように思われる。

#### BP-12 (図V-3)

位置：O-9-b

規模：0.74×0.69×0.21 m

土層説明：1層-黒色土。2層-暗灰褐色土。3層-暗褐色土。4層-黄褐色土。

遺物：覆土中から、径20 cmほどの礫が2点出土している。

#### BP-13 (図V-4)

位置：P-8-C

規模：0.61×0.57×0.17 m

土層説明：1層-黒色土。2層-暗褐色土。

遺物：出土していない。

#### 柱穴状ピット (図V-5)

発掘区東側平坦地のS-5・6グリッドから、5個の柱穴状ピットが検出された。このうち、BSP 1~4は、径約40 cm、深さ70 cmで、楕円形である。BSP-5は他の4個のピットより小型で、径約20 cm、深さ約30 cmである。これらの5個のピットは約2.5 m間隔で掘立柱様に並んでいる。ピット内には、II層と同質の土がみられることから、縄文時代中期以降のもので、あるいは開拓時のものと思われる。堅穴住居跡の上部が何らかの理由で削平されたものかもしれないが、確認することはできなかった。

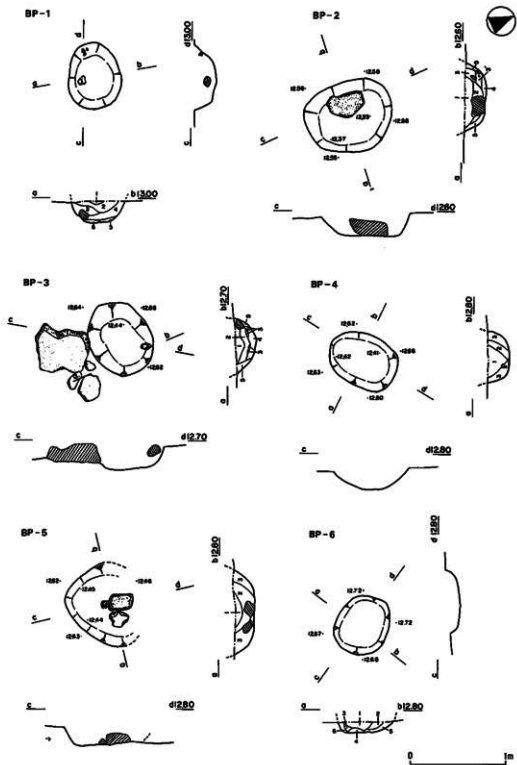


図 V-2 B地区の遺構(1)

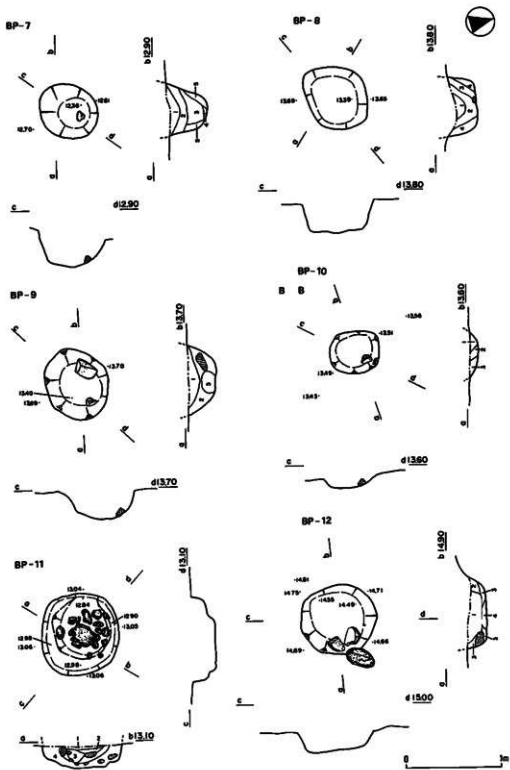


図 V-3 B地区の遺構(2)

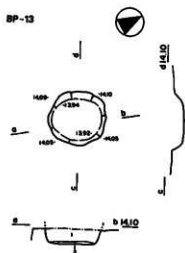


図 V-4 B地区の遺構(3)

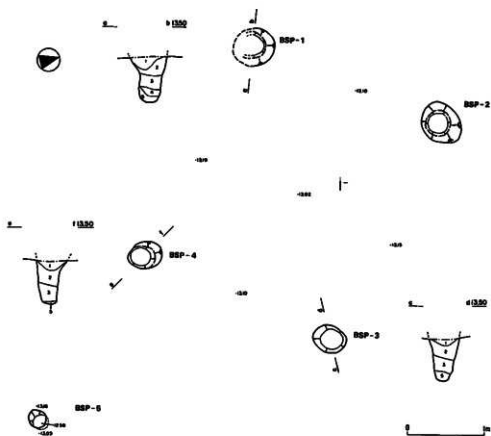


図 V-5 B地区の遺構(4)柱穴状ピット位置図

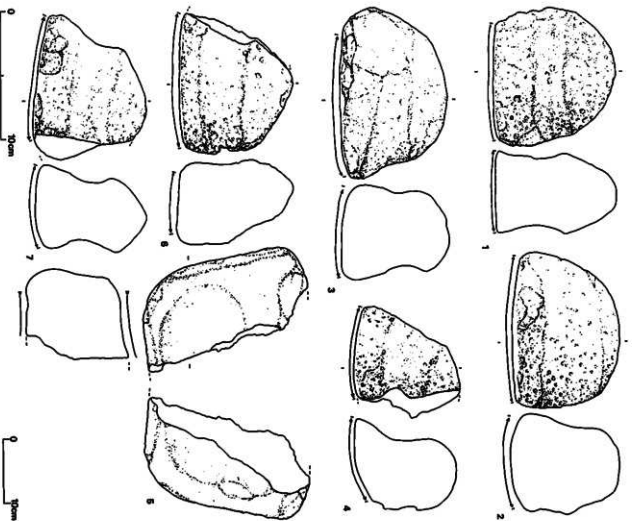


図 V - 6 追分出土の石器

## 3 包含層出土の遺物

## (1) 土器

## I群a類 (図V-7・1~3)

1は、口縁部に2~3本の沈線をもつ。沈線直下から胴部上半にかけては、貝殻腹縁による縦位の刺痕列と横位の連続する貝殻腹縁圧痕文が交互に施されている。胴部下半から底部にかけても、連続する貝殻腹縁圧痕文がみられる。乳房状尖底、貝殻腹縁による圧痕文・刺痕列などの器形や文様の特徴からみて、住吉町式土器に比定されるものである。2・3は、同一個体の破片である。器面には、連続する貝殻腹縁圧痕文が羽状に施されている。1~3は、いずれも胎土に石英粒が含まれている。器面は、風化によりかなり磨滅している。

## I群b-1類 (図V-7・4~8)

4~7は、絡条体圧痕文が施されており、同一個体の破片と思われる。8はこの土器の底部破片と考えられる。器面の磨滅が著しく、文様は不鮮明である。

## I群b-2類 (図V-7・9~11)

9は、3つの大きな山形突起とそれらの間に小さな山形突起が配され、波状口縁のような形を呈する。比較的大型の深鉢形土器である。器面全体に単節の縄文原体を向きを変えながら羽状に施文している。口縁の6つの山形突起直下にそれぞれ長短3本を一組とした弧状の縄による押圧文を向かい合わせに施し、胴部下には、爪形状の刻みのある貼付帯をもつ。

10は、口縁部と底部を欠いている。胴部の文様・施文方法は、9と同様である。

11は、ゆるやかな波状口縁の深鉢。底部は、欠損している。文様は、器面全体に絡条体と燃糸の圧痕文が波状に施文されている。

## I群b-3類 (図V-7・12~15)

12~15は、微隆起線がみられ、燃糸圧痕文がその上にまでおよんで施されている。

## I群b-4類 (図V-7・16~28)

16・18・19・22は、燃糸圧痕文のほかに、綾絡文が施されている。

20・21は、口縁部に円形刺突文列が2~3段施されている。地文は燃糸圧痕文である。

17・23・24は、燃糸文が羽状に施されている。

25~28は、魚骨回転文土器である。

## III群a類 (図V-7・29~31, 図V-8・32~44)

29・30は、口縁部に貼付帯がめぐり、その上に燃糸で刻みが施されている。また、貼付帯の側縁には、2~3本の平行する燃糸が押圧され、文様の内側には2本組の燃糸の鋸歯状圧痕がある。古武井式土器に類似するものである。

31・32・33は、弁状の突起をもつ。口縁部の貼付帯上には、燃糸による刻みがあり、文様帯の内側には、2~4本組の燃糸圧痕文が貼付帯の側縁に施されている。さらに、平行する燃糸圧痕文の間に、燃糸による馬蹄形圧痕が施されている。34・35・36は、突起がなく、胴部がやや張り出し、口縁部が朝顔形に開く器形である。2~4本の単位燃糸が貼付帯の側縁に押圧さ

れ、さらに、半截竹管あるいは棒状の工具による馬蹄形凹痕が施されている。31~36は、サイベ沢V式土器に相当するものである。

37~38は、突起が低く、外に開く肥厚帯上に、斜めの貼付帯がみられる。41~44は、口縁部にドーナツ状の隆帯が貼付されている。41~42は、ドーナツ状の貼付帯の中央に穴が穿たれている。貼付帯は細い。43~44は、41~44の胴部と底部破片である。37~44は、サイベ沢VI式土器に相当するものである。

#### Ⅲ群b-1類 (図V-8・45~48, 図V-9・49~59)

45は、4つの山形突起をもち、口縁部には断面三角形の貼付帯がめぐっている。貼付帯上には、へら状施文具による刻みがある。また、突起の下部と突起と突起の間に、計8カ所の刻みが施された瘤状の貼付がある。46・47・49・51は、沈線文と、その間に半截竹管状工具による刺突文が施されている。50は、口縁部に肥厚帯をもち、その上に沈線文が施されている。48・51は、斜行縄文を地文とするが、部分的に縄文原体の方向が変えられている。52は底部破片である。地文は斜行縄文である。45~53は、天神山式土器、見晴町式土器とそれに類似するものである。

54~59は、2~3本の沈線による渦巻文・弧状文・平行沈線文が施されている。中期後半の大木系土器と思われる。

#### (2) 石器

本地区より出土した石器の総数は、230点である。以下に、石器の器種別に代表的なものを図示し、その概略を述べる。

##### 石鏃 (図V-10・1~15)

1・2は、柳葉形石器、3は、五角形の石鏃である。4~8は、三角形の石鏃である。4~6は基部が平らなもので、7・8は、基部にえぐりがみられるものである。9・10は、基部が丸いもので、11は、ひし形のものである。12~15は、刃部が厚く、作りの粗雑なものである。1~8は、縄文時代早期の土器に、9~15は、縄文時代中期の土器に伴うものと思われる。

##### やり先またはナイフ (図V-10・17)

泥岩製で非常にもろく、粗雑な作りのものである。縦長の剥片を用いて先端部に加工が施されている。周縁部の加工は、部分的にみられる。

##### 石錐 (図V-10・16) 不定形の剥片の一端を加工したものである。珪質頁岩製。

##### つまみ付ナイフ (図V-10・18~30)

18~19は、不定形剥片を利用したものである。20~29は、縦長の定形的なものである。片面全体に二次加工が施されている。30は両面加工のものである。20~28は、縄文時代早期の土器に伴うものと思われる。

##### スクレイパー (図V-11・31~39)

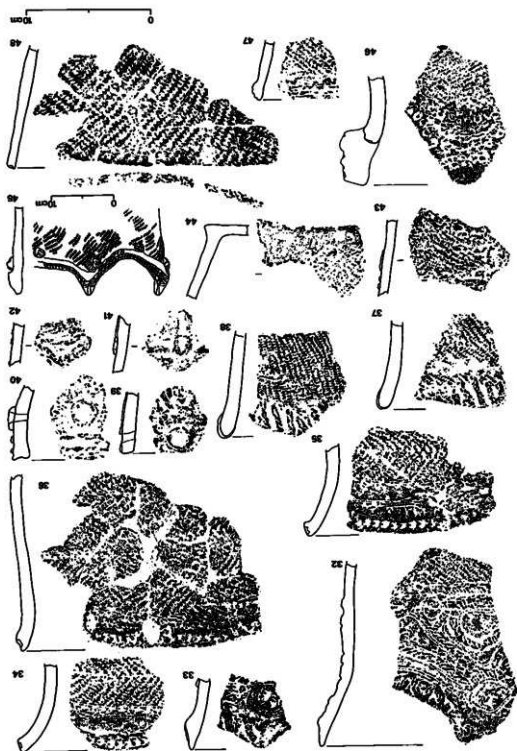
31~33は、石べらと称されるものである。34は、両面加工のラウンドスクレイパーである。35~39は、不定形剥片を利用したものである。

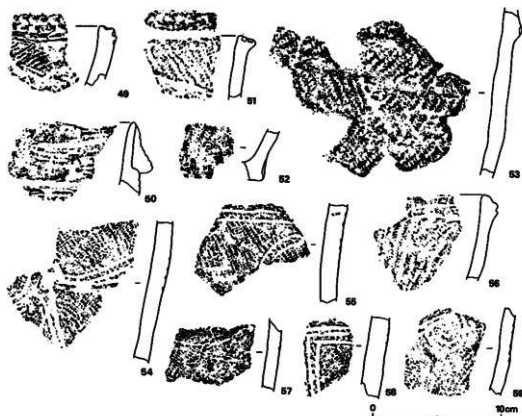


図V-7 包含層出土の土器(1)



図V-8 包帯層出土の土器(2)





図V-9 包含層出土の土器(3)

## 石斧 (図V-12・40-43)

40は、擦り切り痕がある。流紋岩製。41・42は、泥岩質の非常にもろい石材を用いている。ともに、側縁にたたきによる剥離面が残っている。42は、棒状の自然礫に刃部を作り出したものである。43は、全面磨製のものである。40は縄文時代早期の土器に、42・43は、縄文時代中期の土器に伴うと思われる。

## たたき石 (図V-12・44)

安山岩質の丸味をもった自然礫を用いている。ほぼ全周にわたってたたき痕がみられる。

## 台石 (図V-12・45)

石材は板状の安山岩を使用している。ほかの2点は、安山岩である。

## すり石 (図V-12・46-49, 図V-13・50-53)

48は、断面が丸味をもつ三角形の礫の稜を擦ったものである。46・47・53は、扁平礫の側縁を擦っている。47・53は、側縁のほかに、扁平面も擦っている。49-52は、北海道式石冠と称せられているものである。46-48・53は、縄文時代早期の土器に、49-52は、縄文時代中期の土器に伴うものと思われる。

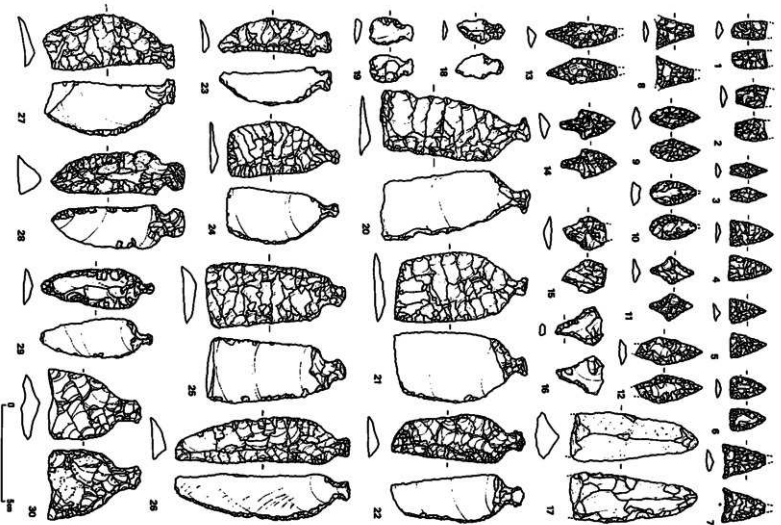
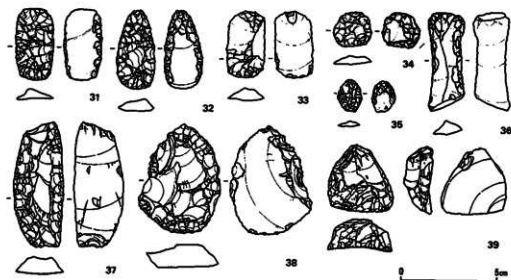


图 V-10 包舍原出土的石器



図V-11 包含層出土の石器(2)

石錐 (図V-13・54)

刃部が直線状になるものである。石材は、板状の安山岩である。

砥石 (図V-13・56・57)

研磨面が平滑なもので、いずれも砂岩である。

石錘 (図V-13・55)

扁平礫の短軸の両端に打ち欠きをもつタイプに入るものと思われる。一方の打ち欠きが明確でない。石材は、安山岩である。

加工痕・使用痕のある礫 (図V-13・58)

棒状の礫の2面にそれぞれ2本の溝状の擦痕がある。

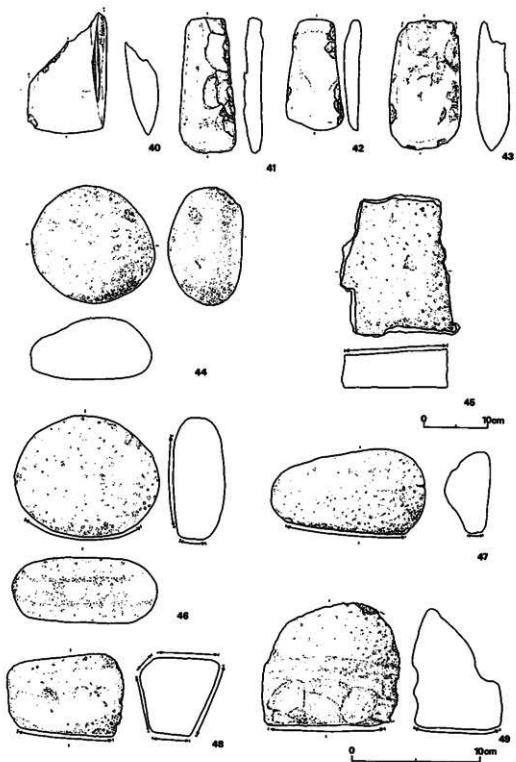


図 V-12 包含層出土の石器(3)

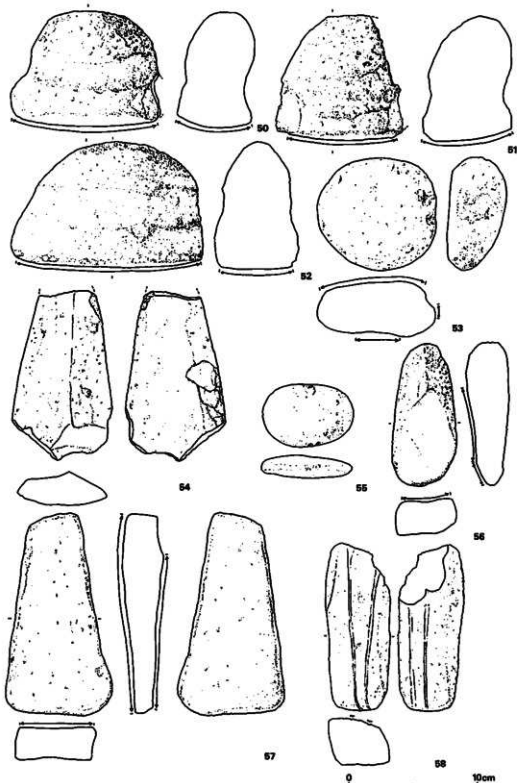


図 V-13 包倉層出土の石器(4)

#### 4 小括

B地区は、縄文時代早期・中期の遺跡である。

発掘区南東の平坦部と中央部に確認された小沢の縁辺部から検出された13カ所のピットのうち、BP-5・7は床面、BP-9・10は壁の立ち上がり際、BP-1・3は覆土上部から、北海道式石冠が出土した。BP-1・3の石冠は流れこんだものの可能性もあるが、北海道式石冠は縄文時代中期の特徴的な石器であるところから、これら6カ所のピットは、縄文時代中期の遺構と考えられる。このほかの7カ所のピットも、遺構内から遺物は出土していないが、形状・規模が類似していることや近接して掘りこまれていることかどからみて、先の6カ所のピットと同時期のものともみなされる。

土器は、縄文時代早期と中期のものが計4,500点あまり出土した。これらは大半が小破片で、広い範囲に散在しており、復原できたものは早期に属する4個体だけだった。

早期の土器は、住吉町式・東銅路Ⅲ式・コックロ式・中茶路式・東銅路Ⅳ式に相当する土器が出土している。中期の土器は、古武井式土器に類似するもの、サイベ沢Ⅴ式・サイベ沢Ⅵ式・天神山式・見晴町式に相当する土器が出土し、大木系土器と思われるものもみられる。

石器は、総数230点が出土している。石鏃・つまみ付ナイフ・スクレイパーの占める割合が高い。

B地区は、ゆるやかな斜面とそれに続く平坦地に位置しているため、土砂流や降雨による流水等によって包含層が動いている。このため、包含層中の縄文時代早朝と中期の遺物の逆転や混在がいたるところにみられた。また、遺構の掘り込み面や各時期の生活面とはとらえることができなかった。



B地区 完掘風景



B地区 調査風景





BP-3 完掘



BP-12 完掘



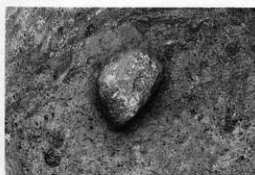
BP-9 完掘



B地区 遺構完掘風景



包含層遺物出土状況



遺構内遺物出土状況



包含層出土の土器



包含層出土の土器



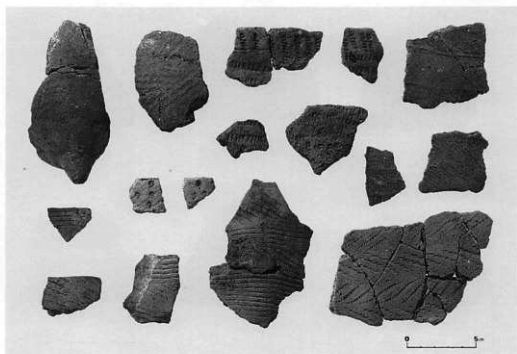
包含層出土の土器



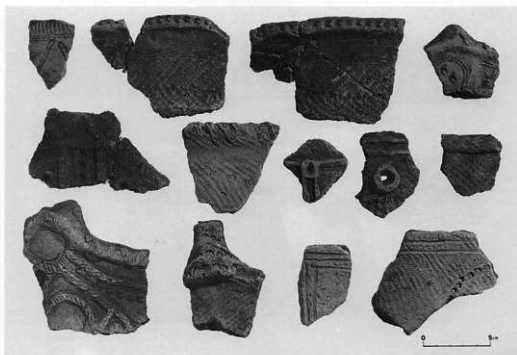
包含層出土の土器



包含層出土の土器

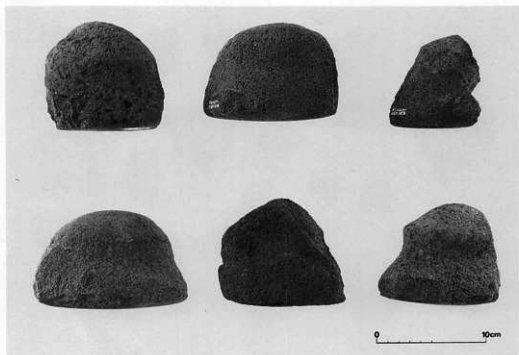


包含層出土の土器(縄文時代早期)

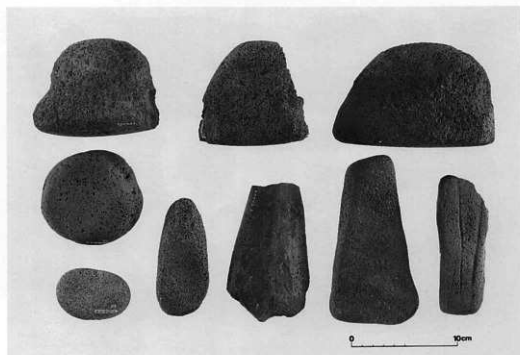


包含層出土の土器(縄文時代中期)

図版Vの6

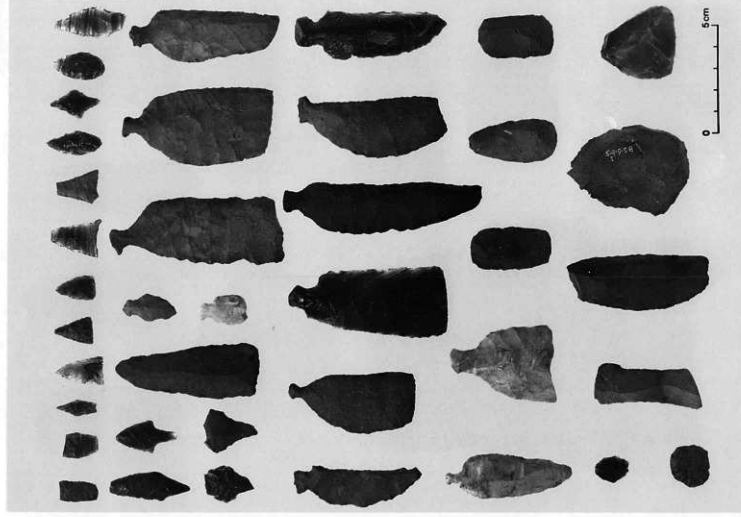


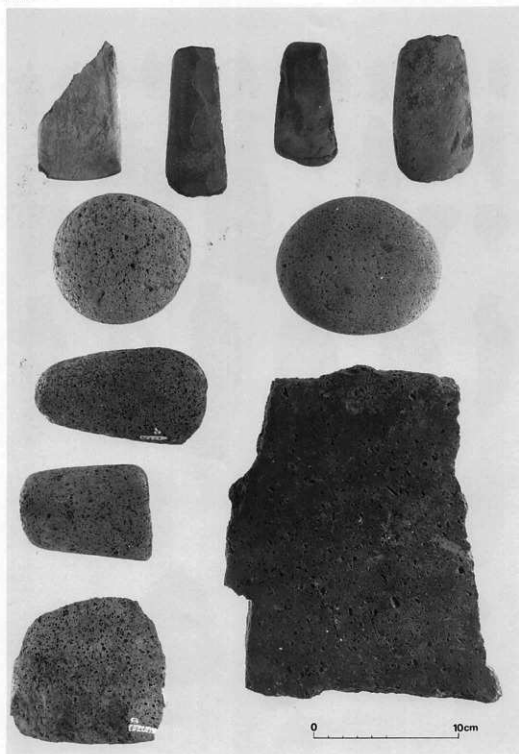
遺構内出土の石器



包含層出土の石器

V B地区の調査  
図版Vの7





包含層出土の石器

表V-I B地区掲載土器の説明表

番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	I a	R-4-c	16	I b-4	R-3-d	31	III a	S-7-a	46	III b-1	O-8-a
2	"	T-5-d	17	"	R-3-b	32	"	R-7-c	47	"	S-6-d
3	"	T-5-d	18	"	R-3-c	33	"	R-7-c	48	"	S-4-b
4	I b-1	R-5-b	19	"	R-3-d	34	"	S-5-b	49	"	R-5-b
5	"	R-5-c	20	"	R-4-c	35	"	S-5-b	50	"	R-5-b
6	"	R-5-c	21	"	R-4-c	36	"	S-4-c	51	"	T-5-d
7	"	R-5-b	22	"	R-3-c	37	"	T-5-d	52	"	S-4-b
8	"	T-5-a	23	"	R-4-c	38	"	T-5-d	53	"	Q-2-c
9	I b-2	R-4-c	24	"	S-6-c	39	"	P-8-c	54	III b-2	T-5-d
10	"	R-5-c	25	"	S-6	40	"	P-8-c	55	"	辨土
11	"	P-6-a	26	"	S-6-a	41	"	P-8-c	56	"	O-8-d
12	I b-3	O-5-c	27	"	S-6-c	42	"	P-8-c	57	"	R-5-b
13	"	P-6-a	28	"	S-6	43	"	R-5-b	58	"	T-5-a
14	"	R-3-e-d	29	III a	S-6-b	44	"	P-8-a	59	"	辨土
15	"	P-3-c	30	"	T-6-a	45	III b-1	O-8-a-b			

表V-2 B地区掲載石器の説明表

番号	名称	分類	発掘区	出土層位	素材	番号	名称	分類	発掘区	出土層位	素材
1	石 錐	I A-2a	S-6-c-45	II層	黒曜石	30	つまみ付ナイフ	III A-4	S-5-a-3	II層	めのう
2	石 鉄	I A-2a	S-6-c-45	II層	黒曜石	31	石 べら	III B-1	R-4-b-4	II層	チャート
3	石 鉄	I A-2b	R-4-c-16	II層	黒曜石	32	スクレイパー	III B-1	T-3-a-4	II層	頁岩
4	石 鉄	I A-3	P-2-b-3	I層	黒曜石	33	スクレイパー	III B-1	S-5-b-29	II層	頁岩
5	石 鉄	I A-3	Q-2-d-2	II層	黒曜石	34	スクレイパー	III B-2	P-5-d-4	II層	頁岩
6	石 鉄	I A-3	Q-6-d-2	II層	黒曜石	35	スクレイパー	III B-2	P-5-d-4	II層	黒曜石
7	石 鉄	I A-3	P-8-b-13	II層	黒曜石	36	スクレイパー	III B-9	L-10-b-1	II層	チャート
8	石 鉄	I A-3	Q-8-a-10	II層	珪質頁岩	37	スクレイパー	III B-9	S-4-c-34	II層	チャート
9	石 鉄	I A-4	P-2-b-1	II層	黒曜石	38	スクレイパー	III B-9	S-6-b-5	I層	頁岩
10	石 鉄	I A-4	O-8-a-1	II層	黒曜石	39	スクレイパー	III B-9	S-4-c-3	II層	めのう
11	石 鉄	I A-4	S-6-d-7	I層	黒曜石	40	石 斧	III A-1	T-5-a-3	II層	流紋岩
12	石 鉄	I A-4	T-5-b-1	II層	黒曜石	41	石 斧	III A-3	Q-7-c-15	II層	泥岩
13	石 鉄	I A-4	R-4-b-2	II層	黒曜石	42	石 斧	III A-3	T-5-a-2	II層	泥岩
14	石 鉄	I A-5	S-5-d-6	II層	黒曜石	43	石 斧	III A-5	T-3-d-16	I層	片岩
15	石 鉄	I A-5	S-6-c-27	?	黒曜石	44	すり石	III A-5	T-4-d-4	?	安山岩
16	石 錐	II A-8	N-3-a-4	I層	珪質頁岩	45	たたく石	V A-2	S-4-a-2	II層	安山岩
17	やり又はナイフ	I B-2	S-5-c-1	I層	泥岩	46	すり石	III A-1	S-4-c-7	II層	安山岩
18	つまみ付ナイフ	III A-1	S-6-c-46	II層	珪質頁岩	47	すり石	III A-1	S-4-c-26	II層	安山岩
19	つまみ付ナイフ	III A-1	S-6-c-46	II層	珪質頁岩	48	台 石	V B-1	T-5-d-17	I層	安山岩
20	つまみ付ナイフ	III A-1	Q-4-c-13	II層	珪質頁岩	49	北海道式石碇	III A-4	S-4-c-26	II層	安山岩
21	つまみ付ナイフ	III A-1	T-5-d-77	II層	珪質頁岩	50	北海道式石碇	III A-4	N-10-d-5	II層	安山岩
22	つまみ付ナイフ	III A-1	S-6-b-6	I層	珪質頁岩	51	北海道式石碇	III A-4	O-9-c-19	II層	安山岩
23	つまみ付ナイフ	III A-1	P-2-d-1	II層	珪質頁岩	52	北海道式石碇	III A-4	T-5-d-15	I層	安山岩
24	つまみ付ナイフ	III A-1	R-4-c-24	II層	珪質頁岩	53	すり石	III A-5	S-7-d-3	II層	安山岩
25	つまみ付ナイフ	III A-3	O-5-c-1	II層	黒曜石	54	石 碇	III A-1	N-10-d-6	II層	安山岩
26	つまみ付ナイフ	III A-3	O-2-b-1	I層	珪質頁岩	55	金 鎌	III A-3	S-3-d-10	II層	安山岩
27	つまみ付ナイフ	III A-1	S-4-b-27	II層	珪質頁岩	56	砥 石	III B-2	T-5-d-83	II層	安山岩
28	つまみ付ナイフ	III A-3	R-5-d-4	II層	黒曜石	57	砥 石	III B-2	O-9-c-2	II層	砂岩
29	つまみ付ナイフ	III A-3	N-2-c-2	II層	珪質頁岩	58	礫	X B	S-4-d-11	II層	安山岩



## VI Z地区の調査

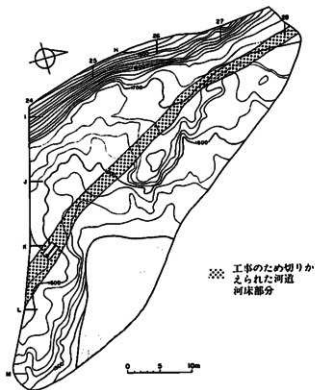
### 1 概要

Z地区は、川上B遺跡のなかで、もっとも北に位置している（図I-2・3）。調査区の東縁は、ヤンケシ川で、西縁は、河岸段丘状の急傾斜地で区切られている。道路工事が開始されるまでは、ヤンケシ川の河川敷につらなる林地であった（図版VIの1）。

土層の堆積状態は、図VI-2に示すとおりであるが、図版VIの2・3・5などにみられるように、遺物包含層の土層はうすく、掘り下げるとすぐに河床礫に達するところが多い。

調査に着手する直前に、道路工事のために河道の切り替えがおこなわれ、その周辺に排土が盛られていた。このために、自然地形の把握が困難になったが、調査終了時の地形図（図VI-1）による地形を、遺物出土の状況と関連して述べると、次のようになる。

26ラインにそって、幅5m、長さ10mの微高地がJラインのところまでのびている。この微高地を中心にして、縄文時代早期のI群a類の土器が分布している。H-26-d区付近は、傾斜地あるいは平坦地になっているが、この部分から縄文時代中期の土器が多く出土している。この2ヵ所をのぞくほかのところからは、散発的に遺物が出土している。



図VI-1 Z地区の地形(最終面地形図)

ヤンケシ川の自然河道に接する位置に、木わく（図版VIの4）が検出された。一枚板4枚からなる一辺90cmの方形で、深さ40cmほど。底板はなかった。礫が多くまじる堆積土の下半には、カヤ、ササ、小枝などが入っていた。木わくは、洋釘でとめてあることから開拓期以降のものと考えられる。

### 2 出土遺物

(4) 土器 縄文時代早期と中期の土器が800点ほど出土している。

縄文時代早期の土器は、H・I-25・26区のIII層暗褐色土から多く出土しているが、口縁部破片をもとに数えると、個体数は10個以下

である。これらは、器形・文様などほぼ共通しており、ひとつの土器型式としてとらえることのできる資料である。切り替えの河道が土器の集中する部分のほぼ中央を横切っているためもあり、器形を復原できたものはないが、器形、文様は次のとおりである（図VI-3、図版VIの6・7）。

底部は平底である。15・30・48などから推定した底部外側の直径は9～10 cmになる。口縁部は6・7にみるように水平であり、口縁の断面をみると、外側に若干ひらくとんがりを示している。6・7から推定した口縁部の直径は約18 cmである。内面は、口縁部の近くに横方向の条痕がみられるほかは平滑である。外側の文様は、6・7・13・15・20などによると、口縁部に近いところに結条体圧痕、それについて底部近くまで横走沈線がある。6・7の両方に結条体圧痕を横に区切るかたちで三列の連続刺突文があり、7・16・20・24・25・27・32などには横走沈線の間にもこの文様がみられる。

縄文時代中期の土器は、H-26-d区付近の傾斜地・平坦地から出土したものが多く、もろくて小さな破片がほとんどである。器形を復原できたのは図VI-3の1のみで、サイベ沢Ⅶ式に相当する。49～62は、1と類似したものである。63は、幾分肥厚した口縁部から斜行縄文が施されている。64は口縁部で磨滅が著しいが、沈線と沈線の間には縄文がみられる。65は口縁部から縦細な斜行縄文が施されている。66は、沈線のみられる胴部破片である。

67～70は、焼成、胎土、繊細な縄文などから推定すると、縄文時代早期の摺糸文の可能性がある。71は、内面、外面に残る条痕から推定すると、縄文時代早期の貝殻文土器の可能性がある。

(c) 石器 石器は、石鏃、石槍、つまみ付ナイフ、スクレイパー、石斧、すり石などが出土しているが、これらはすべて図示してある。土器との伴出関係を明示できる出土状態の石器はない。

### 3 小括

調査区域のほぼ中央から、ひとつの土器型式としてとらえることのできる縄文時代早期の土器を10個体ほど検出した。これらの土器は、器形を復原できたものはないが、直径10 cmの平底、直径18 cmの水平口縁、高さ25～30 cmと推定できるものがある。外側の文様は、口縁部ちかくの結条体圧痕文とそれより下の横走沈線、そして結条体圧痕文や横走沈線を横に区切るかたちの連続刺突文などである。これらの器形、文様の特徴は、苫小牧市有珠川2遺跡のI群b類（アルトリ式）と呼ばれたものとはほぼ同じであり、さらに浦幌町共栄B遺跡の浦幌式土器に類似点を求めることができる。この類似点をよりどころにして、浦幌式土器に石刃鏃が伴出することを重視するならば、A地区55年度調査の補遺として示した石刃鏃は、このZ地区の土器に伴う可能性がみちびきだされる。

図版VIの1



A地区からみたZ地区の旧状(1980年夏)



Z地区の調査状況(1984年夏)



調査状況



調査状況

図版VIの3



切り替え河道の東側の調査状況



切り替え河道の西側の調査状況



木わくの検出状況



木わくの検出状況

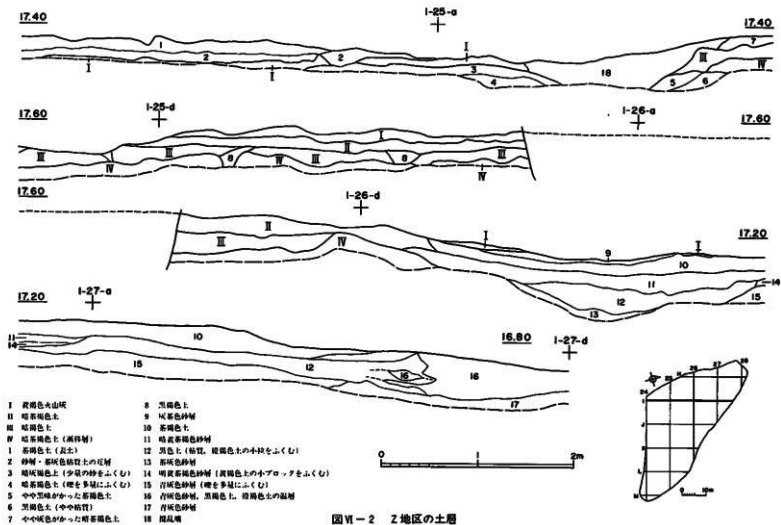
図版VIの5



南側からみた27ライン（G、H区）の土層断面

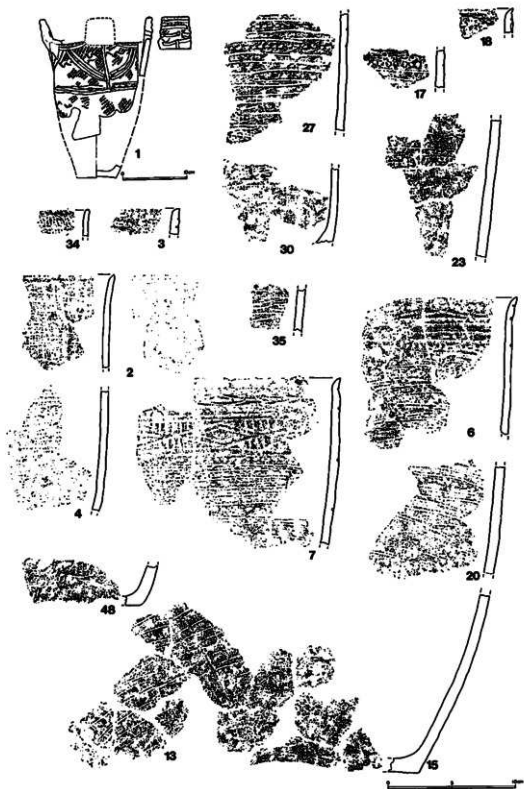


東側からみた1ライン（26、27区）の土層断面



図VI-2 Z地区の土層



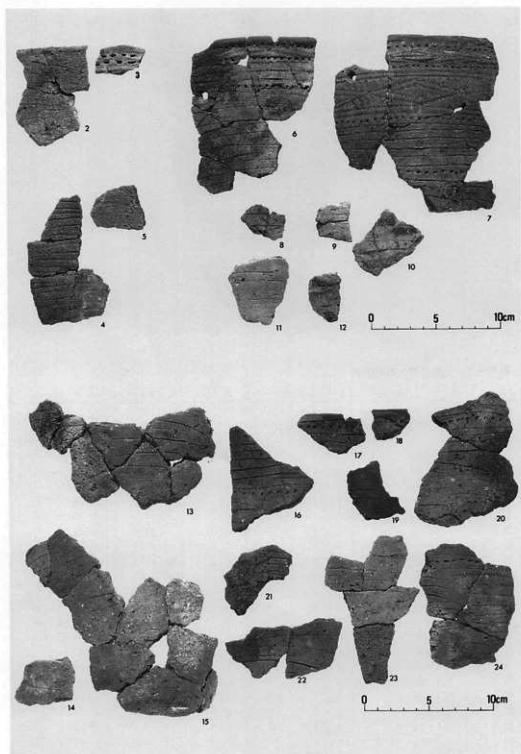


図VI-3 Z地区の土器

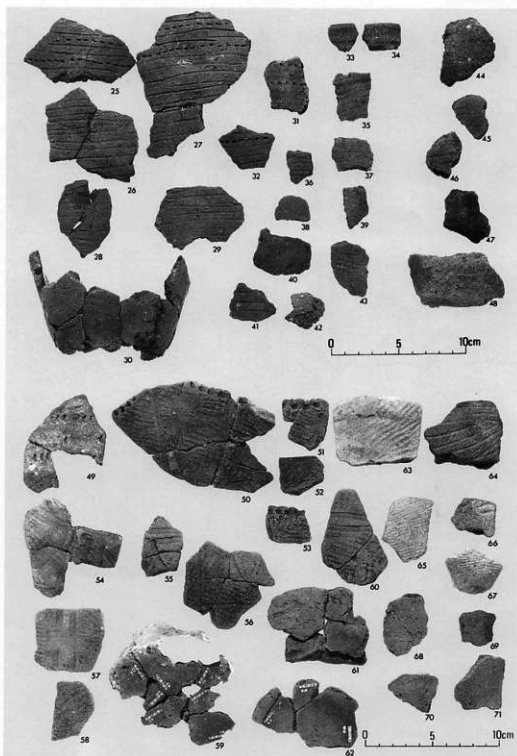


表VI-1 Z地区の土器説明表

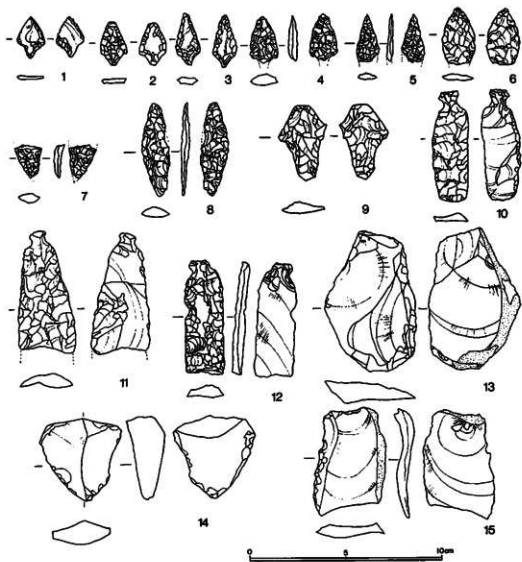
番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区	番号	分類	発掘区
1	III b-1	H-26-d	25	I a	H-25-a	49	III b-1	I-27-a
2	I a	I-25-d・I-25-b	26	I a	H-25-c	50	III b-1	H-26-a
3	I a	I-25-c	27	I a	I-25-a・H-25-c	51	III b-1	H-26-d
4	I a	I-25-d・I-25-b	28	I a	H-25-c	52	III b-1	H-26-a
5	I a	I-25-b	29	I a	H-25-c	53	III b-1	H-26-d
6	I a	I-26-a	30	I a	H-25-c	54	III b-1	H-26-d
7	I a	I-26-a・I-26-c	31	I a	H-25-a	55	III b-1	H-26-d
8	I a	I-26-a	32	I a	H-25-a	56	III b-1	H-26-d
9	I a	I-26-a	33	I a	H-25-a	57	III b-1	H-26-d
10	I a	I-26-a	34	I a	H-25-a	58	III b-1	L-23-c
11	I a	I-26-a	35	I a	H-25-a	59	III b-1	H-27-b
12	I a	I-26-a	36	I a	I-25-a	60	III b-1	H-26-d
13	I a	I-25-d	37	I a	H-25-a	61	III b-1	H-26-d
14	I a	I-25-d	38	I a	I-25-d	62	III b-1	H-26-d
15	I a	I-25-d	39	I a	I-25-a	63	III b-1?	I-27-a
16	I a	I-25-d	40	I a	H-25-c	64	III b-1?	I-27-a
17	I a	I-26-a	41	I a	I-25-a	65	III b-1?	I-27-a
18	I a	I-25-d	42	I a	I-25-a	66	III b-1?	H-24-b
19	I a	I-25-d	43	I a	H-25-a	67	I b?	H-27-c
20	I a	I-25-d	44	I a	H-26-b	68	I b?	G-27-a
21	I a	I-25-d	45	I a	H-26-d	69	I b?	K-24-a
22	I a	I-25-d	46	I a	I-26-a	70	I b?	G-27-b
23	I a	I-25-d・I-26-a	47	I a	I-26-a	71	I a?	K-24-a
24	I a	I-25-a	48	I a	H-26-a			



Z地区の土器



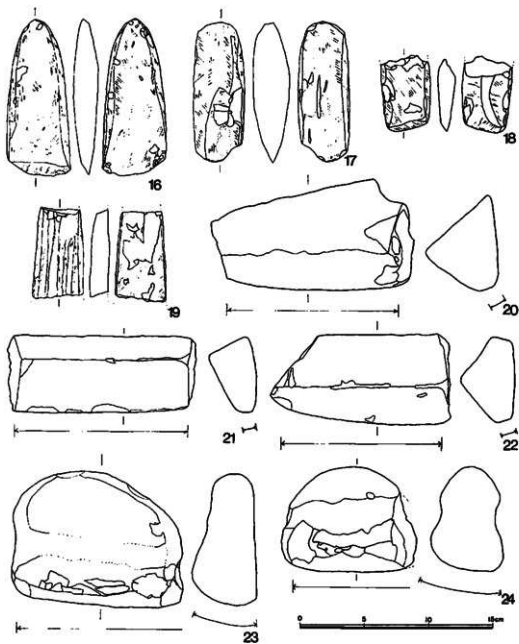
Z地区の土器



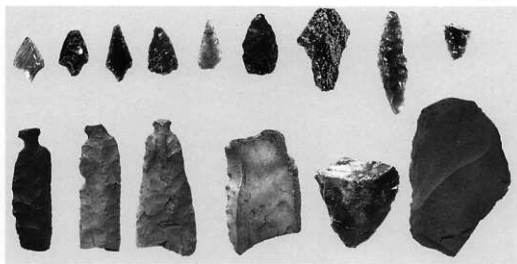
図VI-4 Z地区の石器

表VI-2 Z地区の石器説明表

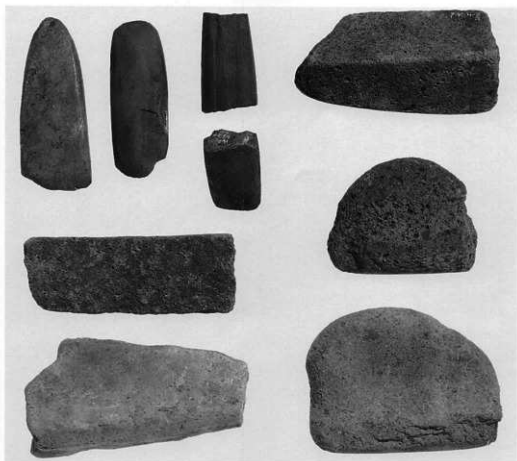
番号	名称	分類	発掘区	重さ(g)	材質
1	石 鏃	IA5	G-25-c	0.6	黒曜石
2	"	"	G-25-c	1.1	黒曜石
3	"	"	G-25-c	0.9	黒曜石
4	"	"	H-25-c	1.4	黒曜石
5	"	IA8	H-26-c	0.6	黒曜石
6	"	"	J-26-a	2.1	黒曜石
7	"	"	I-25-d	0.8	黒曜石
8	"	IA9	L-24-a	2.5	黒曜石
9	石 槍	IB1	I-26-b	5.0	黒曜石
10	つまみ付ナイフ	IIIA1	I-26-b	6.7	頁岩
11	"	IIIA2	I-25-d	2.9	珪質頁岩
12	"	"	J-22-b	9.4	頁岩
13	スクレイパー	IIIB9	H-27-b	37.5	安山岩
14	"	"	I-26-d	10.9	頁岩
15	"	"	I-25-a	12.4	頁岩
16	石 斧	IVA5	H-25-c	169.5	蛇紋岩
17	"	"	J-26-a	200.0	緑色泥岩
18	"	"	J-26-a	46.3	蛇紋岩
19	"	IVA8	J-26-a	83.0	緑色泥岩
20	すり石	VIA1	H-26-d	940.0	安山岩
21	"	"	H-26-d	500.0	安山岩
22	"	"	H-26-d	600.0	安山岩
23	"	VIA4	H-26-d	1,140.0	安山岩
24	"	"	II-26-d	620.0	安山岩



図VI-5 Z地区の石器



Z地区の石器



Z地区の石器





---

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告 第20集  
登別市 川上 B 遺跡

—北海道埋蔵文化財センター調査報告—  
埋蔵文化財第二次発掘調査報告書—  
昭和60年3月30日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター  
064 札幌市中央区南2条西11丁目  
TEL(011)561-3131  
印刷 協業組合 高速印刷センター  
札幌市西区環2条5丁目2-48  
TEL(011)683-2231

---

この報告書は、日本道路公団札幌建設局の了解を得て  
増刷したものです。



10017104

其内五册为文部省编定之